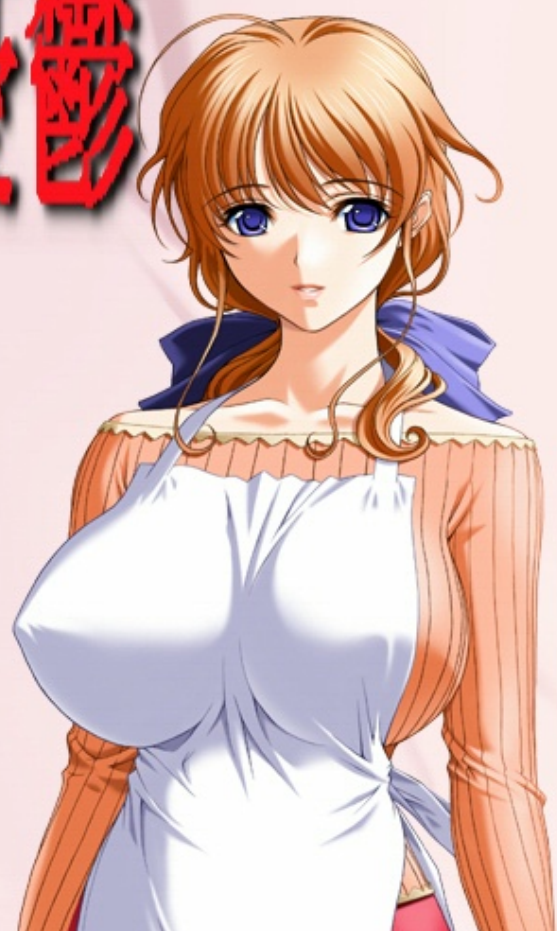


# 主婦の密やかな憂鬱



P D F 閲覧ソフト (Adobe Reader X など) によっては、  
「見開き」に設定した場合、ページが右から左へ進みます。

## 目次

プロローグ	三
第一章 食卓で乱されるエプロン人妻	一九
第二章 夫以外の男に開発される巨乳	四九
第三章 ほぐれていく心。育つ貪欲さ	七六
エピソード	九〇

## 主な登場人物紹介

川島 みずほ（かわしま みずほ）	専業主婦。不埒は見逃せない性格。
九十九 正吾（つくも しょうご）	みずほの息子の友人。彼女の弱みを握る。

# プロローグ

夫がボーナスをもらった折に、いくばくかのお小遣いを貰えたので、たまには贅沢を試みようと思つて遠くのデパートへでかけることにした。

息子を送りだしたあと、手早く家事をすませると久しぶりに化粧をバツチリ決め、半ばタンスの肥やしになつていたヨソ行き用のとつておきを着こんだ。

通勤時間を過ぎて空き始めた電車に乗り、開店時間直後の十時十分にデパートへのりこんだ。あれやこれやと目が引っぱられたものの、『これを買う位なら家のために貯金しておいた方が……』と思つてしまい、結局ウィンドウショッピングで終わってしまった。

とは言え、それなりに楽しめたので満更でもなかったのだけれど、その帰り道にとんでもない現場に居合わせてしまった。

川島みずほが乗つたのは、間違いなく女性用車両だった。

NR東日本の木森山線には、女性用車両が設けられている。先頭の一両だった。みずほはそれを知っていたので、帰りも迷わず利用した。男性も乗る車両よりも気楽でいられるからだつた。

川島みずほは三十三歳。専業主婦をしている。家族は彼女を含めて三人の核家族。単身赴任の夫はIT関係の仕事をしていて、息子は思春期の学生だった。ごくごく平凡な家庭である。

だが、みずほは非凡な容姿をしていた。

やや幼げで清楚な顔立ちの一方、身体はとてもグラマラスだった。男性の興味の的になりがちなムネは百センチ近い。胸元の盛りあがり、頂点を延ばした大福じみた球体型をしている。腰の括れは深く、高い位置にあるお尻はポリウム豊かに張り詰めている。太腿が充実している反面、下腿はスラリとしていた。

女性ホルモンの仕事ぶりが著しい女体は、例え大きめのジャージを着けていても起伏が浮かんでしまう。痴漢にあったことこそないが、男性の視線を感じることはよくあった。自分が悪いわけでもないのだけれど、恥ずかしくて仕方がない。だから、電車に乗るときは女性用車両を利用している。

「あ……………んっ……………はふう……………」

発射後の車内アナウンスを聞き流し、電車がレールを走る際のガタンゴトンガタンゴトンを聞くともなしに聞いていた時、神経を伝ってきたある音情報にハツとした。場に不似合いな濡れ声だった。

「……………え？」

怪訝に思つて周囲を見回す。乗客は二十人ほど。買いもの帰りと思しき、エプロン姿のおばさん。孫の家にでも行く途中なのか、風呂敷包みを大事そうに抱えた和服の老婆。皺一つないスーツで身を包んだ若いOL。逆に、くたびれた表情をしているOL。老若の差はあつても全員、成人だった。

ほとんどは窓の下の長シートに座っていたが、若い何人かはつり革につかまっている。そして、幾人かが気まずそうに視線を伏せていて、数人が赤面しながら同車両のうしろの出入り口を眺めているのに気づいた。

みずほも見やる。なんとそこに男がいた。出入り扉に手をついたセーラー服の女の子に、背中から覆いかぶさっている。

男はまだ未成年に見えた。息子と同じくらいだろうか。学園の制服みたいな黒のスラックスをはいていて、上は真っ白いYシャツ。胸元が第二ボタンまで開いている。見え隠れする日焼け色の胸元は、筋肉質に盛り上がっていた。

何本かの指には、煤けた輝きを放つ指輪が嵌められている。手首には金のブレスレットが幾つか、そして首に金のネックレス。

肌の色といい満艦飾ぶりといい、自分は『チャラ男』です、と全身全霊で主張している。顔は人懐っこそうな童顔だった。

彼は彼女の耳元で唇を動かしていた。何事かを囁いている風だった。両手は胸元に密着

して、十本の指が蜘蛛の足のように蠢いている。どうやら長い間そうしていたらしく、触れられている胸元は皺くちやだった。

「ちよつとそのキミ！」

みずほはつかつかと歩みよると鋭く言い放った。ほのかな甘さを漂わせる自分の声が、注意や叱責に向いていないことは自覚している。だから、できる限り胸を張り、声に威力をこめた。

こめたものは、おおむね怒りだった。彼の行為はどう見ても痴漢であり、言い方を変えれば女性への暴行だ。とても許容できるものではない。無論、仮に女が男を痴漢していても、そこに暴力の行使があるのだから、やはりみずほは立ちあがったろう。

そして、堂々と痴漢が行われていても見て見ぬふりをしたり、それどころか見世物にしている周りの人間にも、別ベクトルの怒りがこみあげてくる。

川島みずほはそういう女性だった。

男はぴたりと動きをとめ、顔だけのみずほに向けてきた。しげしげと見てくる。一対九の割合で逆ギレされると思っていた正義漢の主婦にとっては、想定外の反応だった。

「どうかしましたか？」

まるで道端で知らない人間に声をかけられたかのように尋ねてくる。意外に、喋り方はハキハキしていた。

「どうしましたかじゃないでしょうか！？ 自分が何をしてるかわからないの？ 痴漢よ痴漢。そっちの彼女に暴力を振るう、最低の行為に手を染めてるの。鉄道警察に突きだされても文句はいえないことをしてるのよ！」

またまた想定外の反応に内心面食らいながら、それでも表面上は凛々しさを崩さずに叱りつける。

「ああ、コレのことですか……すみません。では、次の駅で降ります。ご迷惑をおかけしました」

彼はまた、じっとみずほの顔を見たあとに頭を下げた。正義の人妻は正直たじろいだ。一対九の内の一が実現してしまった。

だが、思ったのも束の間、彼は行為を再開した。

「あのね、次の駅で降りるから許して、ですむことじゃないでしょ？ 反省してるならやめなさい、いますぐ。その子に謝って」

「ち、違うんです………」

口だけの反省か、と呆れて叱りつけていた最中、女の子の声が重なった。

「彼は痴漢じゃないんです………」

初めて、被害者である彼女がみずほを向いた。その顔を見た瞬間、みずほの背筋がゾクゾクと粟立った。

ひどく、しどけなかった。いい歳の主婦でさえも目を見張るほどの色っぽさを振りまいている。同性の乗客たちの中で、喉を鳴らす輪唱が起こった。

あどけなさ満点の円らかな瞳、低く尖った鼻、面積の小さな口。鼻梁の周囲に点在するそばかすと、野暮ったい丸縁眼鏡、三つ編みにしたポニーテールの髪が童顔の度合いに拍車をかけている。

乙女性の記号でもあるセーラー服も、無垢さの演出に一枚噛んでいた。純白のローウエストの上に、エメラルドグリーンの膝下スカート。セーラーカラーと袖の折り返しも同色で、ネクタイじみたりボンは苺色。手足はホツソリとしていて、チラチラ見える太ももの肉づきも小学生並か。下肢を包むハイソックスは白く、セーラー服や折り目鮮やかなプリーツと同様に、洗濯とアイロンを済ませたばかりみたいに整っている。靴は飾り気のない革靴で、こちららもピカピカに手いれされていた。

「わ、わたしが……」

セーラー服で包まれる身体は小柄で華奢だった。二次性徴が起きていないのではないかと疑えるほどに起伏が乏しい。気弱げな声を紡ぐたびに、『手ブラ』が浮き彫りにしている薄いムネが上下する。

「おねだりしたんです……痴漢してくださいっ、て……あぁっ……」

こんなシチュエーションでなければ、図書館のひなたで本を読んでいそうな子だ、で済



む。けれど今は、顔を桜色に上気させ、ほつれた髪を流れる汗で頬に貼りつかせるままにしている。顔全体を見れば、とても満ち足りている風だった。オンナがオトコで満足するといった類の幸福。

「おねだりした……？」

みずほの眉尻が跳ねた。この大人しそうな子が、自分から痴漢プレイを頼んだとでも？とても信じられないことではあるが、彼女の表情を見ていると否定もしきれない。

言い切った時に漏らした熱っぽい吐息は、オトコを知る女であれば思わず唾を飲みこみそうな物だった。自分から望んで身体を委ね、そして心ゆくまで楽しんだ。そうでなければどうてい出せない代物だった。暴行されて出るものでは決してない。

「おっと、次の駅まであと三分くらいか。委員長、このママさんで注意してきた人が二人目だから、約束どおり、最後に注意された所から一番近い駅、つまり次の駅で下車するよ、いいね」

「は、はい……分かってます……」

委員長、ということやはり学生なのだろう。彼女であれば押しの弱い学級委員長というところか。選出時に推薦されて、在任中は厄介ごとを押しつけられ、教師と学生の間で板ばさみになってベソをかく。

『注意してきた人が二人目』ということは、恐らくそれも、乗客が気まずそうにしてい

た理由なのだろう。注意しても続けられたら立つ瀬がないし、相手は将来ある学生なのだからできれば穏便にしたいと思い、放置していたとも考えられる。ひよっとしたら、もう一人に注意されたらやめますから、とも言っていたのかもしれない。

イインチヨウサンの反応を見る限り、誤魔化しの嘘ではないだろう。取り決めが予め行われていて、そして彼女は彼に逆らえない。

彼女の顔は残念そうにしおれていたが、助けようとしたみずほを見る目は恨めしそうだった。みずほは、何だか自分こそが悪者である気にさせられた。

「次の駅まであと三分くらいか……委員長、次のカーブで挿入してあげるね。下車前までには、ボクのチンポできっちりイかせてあげる」

「は、はい……！」

彼女の顔が、大輪の花が咲いたようにぱあっと輝いた。彼はみずほに背を向けて、なにやらごそごそと始め、ほどなくして彼女のスカートの中に自分の股間を押しつけた。

「いくよ、もうすぐカーブだ」

下腹を密着させたまま、間に挟まったスカートをズリあげる。ヒラヒラするエメラルドグリーンの波間で、白くて細い太ももの全容が見えてくる。

「あと十、九………」

セーラー服の女の子はギュッと目と口を閉じている。表情に、オトコのモノを待ちわび

る期待感と、羞恥心が入りまじっていた。きっと、車中の衆人環視で、動物がするのと同じスタイルでセックスをすることへの思いなのだろう、とみずほは思った。

「三、二……」

出入り口の扉にベッタリと貼りつかせている手のひらが小刻みに震えている。一目で強張っていると分かるセーラー服の身体もピクピクと揺れていた。

ピーーーーーッ！

サイレンだか汽笛だかが鳴り響いた刹那、

「アアアア~~~~っ！」

歌の上手な少女アイドルの嬌声だと言われたら、納得しそうな恥声だった。

曲がる方向とは反対側にかかる力を上乘せして、彼の下腹が彼女のヒップに伸しかかっている。巧妙に隠されていたのだろうが、今、彼女のアソコには彼の勃起ペニス突き刺さっているに違いない。

図書館の似合う少女インチョウは、つぶらな瞳と小さな口を大きく開けていた。可愛いらしい舌がこぼれ出て、端から唾液の筋が垂れていた。強張っていた全身が、オトコと合体した歓喜にピクピク震えている。

「あああ……………すごい……………すごい……………」

彼はムネに当てている手の血管を浮き上がらせて、彼女との距離をミリ単位でじりじり

と削りつつ、

「何が凄いいんだい？」

知性がごっそり削げ落ちた女の子の声に、彼が顔をよせて尋ねた。ひっきりなしに震えている女の子とは裏腹に、彼の下半身はどっしりと構えて動かない。

「はあはあ……ペ、ペニスがわたしの中に入った瞬間、身体が雷に打たれたみたいになって……わたしのアソコに入ってるペニスが、わたしをぐぐっと押し広げていて……」  
目を盛大に潤ませながら、はあはあと甘ったるい呼気を撒き散らす彼女。

「ペニスやアソコじゃないだろう？ チンポにマ コ。ボクと違って学年トップスリー入りをキープしてる委員長ともあるう人が、忘れてしまったのかい？」

「ご、ごめんなさい……… ああ………」

唇をわななかせながら、外野をチラリと見る。痴漢に襲われていると思って助けに入ってくれた女性は戸惑いの視線を、顔を赤らめながらも釘付けになっている。OLたちは羨望の眼差しを、藪にらみするおばさんの視線は強い非難を孕んでいた。それら全てを意識して、ほうつとため息をついた後、

「わ、わたしのおま こに、長くてぶっとい勃起チンポが入っていて最高なんです………ふあああ………痴漢プレイをおねだりしてよかったって心の底から思ってます………あんっ」  
言い切って、彼女はブルリと身震いした。ぷくんと生々しい匂いが立ちこめる。みずほ

はようやく気がついた。彼女達が合体している部分の下に広がる床に、ポタッ、ポタッ、と粘っこい雫が垂れていて、握りこぶし大の水たまりができていた。

「なら、もう満足したんだね？　これでおしまいにして、停車を待つかい？」

「あっ、いやっ、いやです！　わたしまだイってません……………イキたいんです、イかせて欲しいんです！」

「他の女性たちが見ているけどいいのかい？　Hな声、きつとでちゃうよ。委員長はこらえ性がないからね。カラダだって、盛大にビクビクウウツてしちゃうだろう。みなさんに、キミの恥ずかしい姿をいっぱい見られるよ？」

意味を成さない呻き声を漏らしながら、彼女はまた乗客たちを見た。顔に差していた桜色が、満開の桜みたいな濃さになった。

「いい……………見られてもいいです……………ううん、見て欲しい……………折角なんだから……………だから、お願いします、みなさんの前でイかせてください……………」

またもやあの艶っぽいため息。快感を感じてしまっているのは疑いかなかった。非常識なシチュエーションに。自分で自分を辱めて、どうかもっと恥をかかせてくださいと彼にねだっている。

「分かったよ」

飼っているメス犬が、しこんだ芸を人前でつつがなくやり終えたのに満足している飼い

主のように、彼が口元を綻ばせる。彼のお尻が、携帯電話のバイブレーションみたいに震動し始めた。

「ああンツ、し、子宮口がほじられてる、あフンツ、ナカが、おま こが痺れてっ」

綺麗な声が、大人でも口にしなそうな卑語を連発する。言葉を放り投げる度に、彼女の目にかかった涙の膜が決壊し、雫が下のまつげを越えて頬を伝っていく。

「委員長の乳首、凄く硬くなってるよ……もっとなんて欲しいかい？」

「弄ってください……そう、そんな風にいやらしくいじってえ……いっつ、乳首い」

オーケーサインで挟まれた乳頭が、コシユコシユと擦られている。時々潰され、かと思えば左右非対称に責められる。彼女の小さな顎がたまらなそうに上下して、掠れた恥声が搾りだされた。

「いいのは、このコリコリ乳首だけかい？ 他にもあるだろう？」

「はい、はい……おま こも素敵です……長くて太くて硬くて熱いペニスが、わたしのおま こにみっちり詰まっ……はあ、椎茸みたいに広がってる傘の部分が、ゴリゴリ擦ってくれて……先っぽも、赤ちゃんの部屋の入り口をズンズン叩いてくれて……」

言葉が積み重なる度に、乗客の何人かの呼吸が荒くなっている。みずほが見る限り、若いOLたちに顕著だった。くたびれた風だった者も、若い学生たちの非常識な情事に目を潤ませている。

「ボクも気持ちいいよ。委員長のおま こは最高だ……生硬だった時のもキッツキツでよかつたけれど、今の熟した……やわやわと絡みついて奥に引きずりこもうとする感じもいい……見た目はこんなに清纯なのに、中身はすごくいやらしいんだものね」

「はああ……はい、わたしはいやらしい女の子です……電車のなかでおま こしたくてたまらなくなるくらい、いやらしい女の子です……だから、イキたくてたまらないんです」

恥しらずな台詞を続ける彼女の唇に、彼が自分のそれを押しつけた。唇での抱擁が始まる。が、すぐに彼は顔を引いた。彼女は舌だけで彼を追いかけ、一方の彼も舌をつきだす。唾液塗れの二枚の舌が、乗客に見せつけるように、宙空でねちっこくダンスを行う。

「はふう、あふ、はあ、いふ、いふうッ」

停車駅が近いことを知らせるアナウンスが流れた。バックからのピストンが加速し、徐々に体位が変わっていく。手のひらだけでなく、肘から下が扉にべったりくっついて、ほっそりとした足がステップを下りて、やはり扉に密着する。

「いふつ、あふああ、いフツ、イフツツッ！」

頬からこめかみにかけてが扉を押しつける形になっても、彼女は舌を突きだして、差し伸べられる舌と淫らなふれあいを続けている。

彼はエメラルドグリーンが鮮やかなスカートを巻きこんで、太ももの付け根をガツシリモち、腹足類のように身体を波打たせている。見ているだけで、一回一回に力がこもって

いるのが分かる。振幅の幅の小ささを見るに、子宮口を一番の標的にしてしつこく突きつけているのだろうか。

「委員長のおま こ、もうイク寸前だね。入り口が締まって、反対に奥が広がっているのが分かるよ……ふふ、凄くいいね」

陶然としている彼女とは反対に、彼は余裕たつぷりだった。あつさりと舌の絡ませあいをやめて彼女に囁き、不敵に微笑んでいる。

「身体から、いやらしい匂いがプンプンしてるよ……汗と、キミのいい匂い……男を夢中にさせるフェロモンの匂い……」

頭頂部に鼻を押しつけて、気持ちよさそうに鼻息を繰り返す。匂いを嗅がれることに弱いのか、彼女の背中が派手にのけぞった。その瞬間、彼の尻が大きく引かれ、勢いよく突きこまれた。子宮口にペニスの先端を迎えたことがある女なら、頭の中で反芻させられそうな生々しい腰の静止が行われたあと、

「ああつ、イクツ、イクウ、イクツ、イクウウー!!」  
幼げな美声の絶叫。

停車直前のアナウンスが流れ始め、電車の窓に駅のホームの光景が飛びこんできた。屋外のホームには何人もいた。新卒らしき、隙なくスーツを着ている若いことから、いかにもベテランという風な少しよれた背広を着こんでいる中年。遊びに出かけるのか、それとも



それが普段着で登校するところなのか、ラフな格好をした大学生風。男も女もいた。

乗客の女生たちと彼らに向かつて絶頂の歌声を披露しながら、図書館が似合う委員長は更に背中をしならせた。全身を突っ張らせ、小刻みな痙攣を繰り返す。ヒラヒラのスカートも、リボンも、ローウエストも伝えられる振動でひるがえっている。みずほの目に、老若男女があっけにとられている姿が映った。

間隔をおいて吐きだされる彼女の呼気が、頬を貼りつかせている扉のガラスを曇らせ、それが桜色を超えて真っ赤になったみだらな細面をより淫靡に演出していた。

絶頂に達してしどけない彼女とは対照的に『チャラ男』は余裕たつぷりで、不敵な微笑を浮かべていた。

「じゃあいこうか委員長。どうも、お騒がせしました」

一仕事終えたという類のため息をついたあと、彼は車内の女性陣に向かつて一礼した。いまだ絶頂の衝撃の海に漂う彼女の肩を抱くと、空気漏れじみた音を撒きながら開いている扉を超えた。

電車内で繰り広げられた出来事を目の当たりにした乗客も、ガラス越しに目撃したホームの客たちも呆然とする中、彼だけは何事もなかったように振舞っている。酔っ払った同僚を牽引するサラリーマンのように、足腰がおぼつかない彼女をリードしながらせわしい人ごみの中に消えていった。

（あんな大人しくて真面目そうな子が……頭もいいって話だったのに……）  
みずほはまだ立ち尽くしていた。別の世界にでも迷い込んでしまったのではないかとさえ思っている。

その一方で、心のどこかで嫉妬心が鎌首をもたげていた。まだまだ性とは縁遠そうな顔をしているのに、サービス過剰な商売女みたいに蕩けた表情をさせられていたなんて電車の中という異常な状況なのに、あそこまで男に寄りかかって、前後不覚にさせてもらえるだなんて。

自分は、夫が単身赴任をしているせいでご無沙汰で、それだけでなくも新婚時期をピークに回数も密度も減っているのに。

ふと、彼らがいた場所に目がいった。そこには、雨漏りのあとめいた水たまりができていた。漂う匂いと粘っこそうな見た目。みずほは股間が熱くなるのを感じた。

# 第一章 食卓で乱されるエプロン妻

夫が相変わらず単身赴任で家を空けていたとある日曜日。息子が言い難そうに、自分の友達に会って欲しいと言ってきた。男友達なのだという。わけを聞いてもあとで話すの一点張りだった。

奇妙なことだと思いつつ、川島みずほはケーキとお茶を用意した。息子の友人なのだから、めかしこむ必要はないと思いつつ、ファンデーションをする。流石に、服装は普段着だったが。リビングのソファアールで通販カタログを眺めながら、友人の到着を待った。

約束の時間きっかりに家のチャイムが鳴った。玄関に向かった息子と共に、リビングにやってきた友達を見てみずほは絶句した。

「初めまして。九十九正吾といます」

人懐っこい笑みを浮かべるその人物は、過日に電車で見かけた男だった。丸眼鏡の大人しそうなセーラー服と一緒に、女性車両をラブホテルに仕立てていた彼。もつとも今は装飾品を一切身に付けていず、ごくごく普通の学生に見えた。

息子は母の様子に怪訝な顔をしたが、結局は何も言わないで友人にソファアールを勧めた。みずほが気を取り直すのを待ってから、事情を話し始め、その内容に彼女はまたもや色を

失った。

「そんな風に、予備校の模試の成績で賭けをしまして、ボクが勝つに至ったわけです。商品として、ママさんに一人暮らしのボクの家に来て食事の世話をしてもらえればと思うのですがどうでしょう？　ずっとでなく、少しの間でいいんですけど」

「ごめん母さん！　って……やっぱりダメだよね……」

当たり前である。他所の家にあがりこんで、その家の子に食事を作るだなんて非常識にも程がある。まるで通い妻ではないか。しかも、賭け事などの景品としてそんなことをねだるなど言語道断と断言していい。

それに、一見して人畜無害そうなこの子は、電車の中であんなおかしなことをしていた。平然と。そんな子の世話をするだなんて。

息子と彼を叱ろうと口を開けた時、言葉が滑りこんできた。

「引き受けられない……ですよね……すみません。単身赴任の父に母がついて……ボクには兄弟もいませんから、広い家に一人で暮らしているのが寂しくて、つい女々しいことを言いたしてしまいました。が忘れてください……」

しよんぼりする姿は、ダンボールの中で通りかかった人間を見る子犬のように哀れだった。みずほが鼻じろむ。

思う。自分だって、息子の世話を焼くことで忘れられているものの、夫婦のベッドで

人で眠る時に寂寥感を感じることもある。もしも、この子くらいの年齢でひとりぼっちにされたなら、自分だって寂しくて仕方ないのでは？

「……………しかたないわね……………分かったわ。でも、今回だけだからね。それに、こういうのでなくとも賭け事はしちゃだめよ、賭け事は恐ろしいって分からない歳でもないでしょう？ 分かった？」

正吾の顔が瞬時に輝き、彼はありがとうございまして、座りながら深々と頭を下げた。  
(別に、ご飯を作つてあげるだけなんだから……………)

電車での様子が脳裏にちらつくが、みずほは自分にそう言い聞かせた。

家の電話が鳴ったのは日曜日の昼前だった。数 の問題集を解くのに夢中になって前夜はかなり遅かつたせいで、九十九正吾はまだ寝ていた。

やかましく輪唱し続ける電話機の内、自室にあった子機の方を寝ぼけまなこで取つて耳に当てる。

相手はマザコンのケがある男友達だった。冗談めかして指摘しても本人は猛烈に否定するけれど、それ自体や日頃の様子を考えれば、十中八九、あいつは母を女として見ていると思う。成績比べに勝利して、その景品として彼の母親にまかないをお願いしたいと言つた時の顔も重要な証拠だろう。

そんな友人の性質を正吾は気にしていない。他の人間であるならば変態扱いするのだから、人の趣味など十人十色なのだ。それに、彼は基本的に気のいいヤツなので屈託なく付きあっている。

「りょーかい。連絡ありがとね」

内容は、彼の母親が食事を作りを訪れてくれるというものだった。一度は引き受けてくれたものの、正直、あとになって断ってくるかとも思っていただけに、朗報でこみあげてくる喜びは大きかった。本当に、彼はその場でうひょひよと跳ね踊った。

「迎える準備をしとかないとな」

寝不足で起きたばかりというだけに、まだ身体がけだるかったが、気合で無視することにする。キッチンと居間を整頓し、掃除機をかけ、シャワーで身体を洗う。約束の時間まであと一時間ほどだが、日頃からこまめに掃除をして、毎日入浴しているお陰で十分にやり終えることはできるだろう。

正吾の心は、ようやく意中の彼と想いを通じあわせた初デート前の少女も顔負けなほど、そわそわドキドキしていた。

一時間後。

友人の母は約束時間ピッタリにドアホンを鳴らした。彼女はキャベツやネギやほうれん草などの野菜がたっぷりつまったアイボリーのエコバックを下げていた。服装は普段着だ

ろう。あの三者面談でも着ていたのを覚えている。若々しくてとても綺麗な顔は、どこことなく緊張していた。

「へえ、よく片付いているのね」

居間に続いてキッチンに案内した時の感想だった。そこでようやく表情が少し柔らかくなった。

「掃除や片付けは好きなんです。散らかってたりすると居心地が悪くて」

彼女は、それはいい心がけねと微笑んでくれた。若い女の子には真似できない、熟成された柔和さと色っぽさがたっぷりまぶされている微笑みだった。自然に、股間がカアツと熱くなった。

差しこむ日の光を浴びながら、川島夫人は食事の支度にとりかかった。鼻歌を歌うことさえしながら、機嫌よさそうにキッチンで動き回る。

(こうしてじっくり見ると、やっぱり綺麗な人だなあ)

初見は、友人がパスケースの中に入れていた家族写真だった。それから興味を持ち始め、図書委員長のおねだりを受けて相手をしていた時に叱られたことが決定打となり、賭けの景品として彼女を求めた。

大勢の前で注意されたことは全く恨んではない。むしろ、立派な人と感心した。大勢が見てみぬ振りをする中、当たり前前のことを実行する胆力には内心拍手を送ったし、眼

鏡の彼女を心配していた優しさには更に好感をもった。穏やかでも凜とした美声も魅力的で、こんな人になら、わざと悪さをしてでも怒られたいと本気で思う。

「やだ、じろじろ見ないでよ……やり難いわ」

視線に気づいて、頬を赤らめている。それでも手は動いていたが。

「気にしないでどうぞ、続けてください」

それで納得できたわけではないようで、変わらず具合悪そうにしていたものの、やがて鼻歌が再開された。

機嫌のよさそうな顔を眺めながら、友人に聞いたプロフィールを思い出す。歳は三十三歳。彼の実の母ではなく、継母なのだという。最初の妻が付きあいきれなかったワーカーホリックの中年にも、難しい年頃の連れ子にもよく尽くしてくれているのだとか。

シャープな頬や強く輝く瞳は、真面目な性格の表れだろう。性格は顔に如実にでるものだから。

赤みを帯びた茶髪は緩くウェーブがかかっており、首のうしろでオリエンタルブルーのリボンでまとめられている。後れ毛の房が左の鎖骨に触れている。瞳の色は鳶色でなくブルーだった。カラーコンタクトをしているのだろう。高く尖った鼻と、薄い牡丹色のひそやかな口が、顔全体を可愛らしくも美しくもしている。

（肌は白くて、ムネもすごく大きくて、とても女性的だ）





露出しているうなじは、透き通った乳白色。だいたい色の長袖シャツと、彼女が持参した純白のエプロンは身体のラインにぴったりくっついていてのだが、豊満な乳房の輪郭と量感をくつきりと浮きあがらせていた。

胸肌は鎖骨の下から乳房の頂上にかけて徐々に膨らんでいき、頂上から下は急勾配。半球型の美巨乳だった。わずかに尖る先端が、乳首が上向きであることを示している。

わきの下から腰骨にかけては蜂の括れを体現している。マゼンダのタイトスカートに包まれた下半身は、ムネに勝るとも劣らないムッチリとした桃尻の軌跡を描いており、網目の細かいパンティーストッキングの太ももは、ムチムチとした肉の充実具合を見せている。膝から下はスラリとしていて、お尻が高い位置にあることと、パンストが形を整えていることが手伝って、流麗な脚線美を大盤振る舞いしていた。

(手も少し荒れてるけれど、指なんかほっそりして……体温はどうなんだろう)

食材や調味料、調理器具を扱う指は男のものとは大違いの細さと美麗さだった。主婦の現実として、手専門のタレント級に美しいとは言えないものの、健気に家事をしていることが明確に分かる手は、正吾は好きだった。あの指で触れられたいと強く思う。

みずほは食事を作り終え、盛り付けをして並べ始めた。カツオぶしと黒ゴマがふられたほうれん草のおひたし。豚肉とキャベツと人参の炒めもの。ワカメとネギの味噌汁。焼き塩シヤケ。そして、正吾が昨夜から保温しておいたホカホカご飯。

(早くて、できた料理も凄く美味しそう……か)

正吾は嘆息した。往々にして無償で行われているので見落とされがちだが、家事労働は賃金を得る手段としての仕事と同じく効率が求められる仕事である。料理はその集大成と言ってもいい。異なる過程を合理的につなげ、短い時間と低労力で成し遂げるのは世間が思うほど容易なことではない。

みずほの様子をずっと見ていたが、彼女は常に数種の作業を平行して行って、無駄なく手際よく処理していた。

(引っかかるんだよなあ)

仕事振りを見るに、料理しかできないとは、あまり考えられない。恐らくは他の家事も上手にこなしているのだろう。知りあってまだ間がないものの、言動や様子から真面目で誠実な性格であることも伺える。

そんな彼女が、髪を染めて瞳の色まで変えているのが不思議だった。服装にしる、身体のラインが分かり易いものを着ている。真面目な女性が、そういうことをしてはいけなことも、そういうことはしないものだとも思わないが、彼女の性格を鑑みれば、どうにもチグハグに感じられる。

湯気をくゆらせる料理と、甲斐甲斐しく食卓を調える人妻を見ながら、正吾は神妙な面持ちで思案した。

(意外といい子なのかも知れないわね)

川島みずほは九十九正吾への評価を改めようかと思いついて始めた。

自分の息子は自室の掃除さえあまりしないので、思春期の男はそういうものかと考えていただけに、よく片付けられている家の中には好意的な驚きを感じた。

料理している様子を見られているのは気恥ずかしかったが、自分が作るものを期待して待っていてくれるのが伝わってきて、くすぐったい気持ちにさせられた。そして、目を輝かせて料理をパクついてくれる姿には、主婦冥利を覚えずにはいられなかった。

夫や息子も、母の日や結婚記念日や誕生日に贈り物してくれるので、妻や母に対して感謝の念を抱いてくれるとは思うものの、日常生活においてそれを表現されることは滅多にない。正直、少し寂しかった。それだけに、嬉しさもひとしおだった。

「おそまつさまでした」

彼のごちそうさまに返す言葉も弾んでいた。みずほ自身、耳を疑ったくらいだ。

「幸せです。ありがとうございましたみずほさん」

「いえ。私の方こそ、美味しそうに食べてくれて嬉しかったわ」と、彼がしげしげとこちらを見てきた。

「何かしら？ 私の顔に何かついてる？」

「いえ、なんでもないです。片付けはボクがしますので。今日は本当にありがとうございます。ありがとうございました」

彼は何事もなかったように立ちあがり、食器を片付け始めた。

「ああ、いいわ。私ができるから。日頃、準備から片づけまで一人でしてるから、片付けるのも何でもないの。キミはゆつくりしていい」

「ありがとうございます。それじゃあ、食器を運ぶくらいは手伝わせてくださいね」

みずほは頷き、シンクに立った。もともとあった、使い込まれたスポンジに食器用洗剤を垂らし、運ばれてくる食器を洗いだす。乾いた布巾で水気をふき取り、重ねていく。鍋やガスコンロなどの器具は、料理をしている内に洗淨済みだった。

「これで最後ね。助かったわ。悪いわきゃっ」

最後の皿を置いた正吾が、背中からみずほに抱きついた。

「ちよつと、どうしたの、やめなさい」

正吾は無言で、みずほの緩くうねる髪に鼻を突っこんだ。身長は頭一つ分ほど彼の方が高かった。

「いやっ、ごらっ」

段々と語気が荒くなる。頭の中に電車内での出来事が蘇る。

(すっかり油断していたけれど、この子はそういう子だったわ……)

布を挟んで背中にべったりとついた胸元の感触が、気色悪くなってくる。伝わってくる体温が、胃のあたりをシクシク痛ませてきた。

パシヤリ。

「えっ？」

携帯電話のカメラ機能でシャッターを切ったような音が聞こえた。その判断は正しかった。眼前に『保存しました』とのメッセージが表示された映像が突きつけられた。映されているのは、男に抱きつかれている自分。

シャッター音が連続した。見せられている携帯電話が裏返され、指が動いて画像を保存し、また本体が裏返され、ということが素早く何度も繰り返される。自分の胸に男の手が乗っている写真、エプロンの胸元が手の形に浮き上がっている写真、男の手でうなじがそつと撫でられている写真、エトセトラエトセトラ。

しばし呆然としていたみずほだったが、我に返って叫んだ。

「それをよこしなさい！」

どれも自分の顔こそ映っていないが、こんなものを夫や息子に見られたらどうなるだろうか。いま着ているのは家族もよく知る普段着で、被写体の身体つきも併せて考えれば母なり妻だと分かるだろう。

これはいたずらされて撮られたものと弁明したら、多分、信じてくれるだろうが、そ

れで済むだろうか？ 自分の妻が、自分の母が、他の男、よりもよって未成年の学生に身体をいやらしくさわられたと知っても、悪感情をもたずにいてくれるだろうか。

家族の絆も、些細な疑念や汚辱感から容易に崩壊しうるもの。その実例は社会に掃いて捨てるほどあるし、それでなくとも再婚した夫も二人目の母を迎えた子供も、そういうことには人一倍敏感ではないのか？

「みずほさんの命令でも聞けませんね……ふふふ、これを旦那さんや息子さんに見せられたら、やっぱり困りますよね」

うしろに伸びてきた手を避けて、携帯電話をソファーに放り投げると、うしろから密着したままで正吾が言い放った。

背筋が凍る発言だった。当たり前前といえは当たり前だが、心臓を鷲掴みにされた気分になる。悪くないと思いついた彼の声が、無性に吐き気を催させる。

「こんな悪ふざけはよしなさい！」

「ふざけてませんよ。月なみですけど、単刀直入に言うと、バラされなくなかったら言うことを聞け、です」

「べ、別にあんなのを見せられても夫も息子も動じないわ。どうぞご勝手に。逆に訴えてあげるから。子供だからって容赦はしないわよ」

声の震えを必死にこらえると共に、まるで目の前に正吾の顔があるかのようにキツとま

なじりをつりあげながら怒鳴った。

「くくくく、勇ましいことで……でも、考えてみてください。あの家は一度奥さんに逃げられてます。自分の身内が、よその男にキズモノにされたとき、旦那さんも息子さんも一生平静でいられるでしょうか？ 嫌な事実は、いつまでも消えない古傷となつて、ふとしたことで爆発しやしませんか？ その結果に家庭崩壊とか。起こらないと本気で思いますか？」

みずほが危惧したことを並べたててくる。彼女が反駁できずにいると、

「だったら、こんな物は『なかった』方がいいですよ？ そうするには、みずほさんが耐えるしかないんです。悪辣なワルモノは、いつだって正しいヒロインを食い物にするものでしょう？ 悪いのはボクであり、みずほさんは悪くなく」

たつぷり五秒の間をおいて、

「そしてボクのいいなりになるしかない。大事な家庭を守るためにね」

唇を噛みしめるみずほ。彼の言葉が胸に突き刺さり、いくら考えても取り去ることができない。

卑劣漢への怒りと、少しでも気を許した自分への憤怒。隙をつかれた悔しさに、写真を撮られた汚辱。脳が激情に吞まれてしまっていて、上手い解決法を考えようとしても思考が進まない。



「どうします？ 飽くまで拒絶して、写真を送りつけられた方がいいですか？ それとも野良犬にでも噛まれたらと思って、家族への思いをボクに見せてくれますか？」

「……………分かったわ、アナタの好きにすればいい……………けど、約束を破ったら承知しない……………絶対に、後悔させてやるんだから」

底冷えする口調だったが、正吾の返事は弾んでいた。

「ありがとうございます。では早速」

初手はうなじだった。背後から片手で抱きついたまま、もう片方の手を伸ばしてくる。全部の指を束ねたうえで、そうつとふれる。ごくごく弱く、指紋の凹凸だけで、あごの始まりから喉の正面までを撫であげてくる。

「んっ……………」

ゾワゾワとしたくすぐったさが起こった。思わずくぐもった声が漏れてしまう。五指は何度か往復する。みずほは気を引き締めて喉に力を入れた。愛撫されて出た声など聞かせてなるものかと強く思う。肩が震えてしまうこともあったが、身を硬くして対処する。

「我慢することないですよ。気持ちいいなら、委ねてしまえばいいんです」

声音はいやに優しくかった。温かな日向を連想させる。

「冗談じゃない……………勝手な妄想を押しつけないで。脅されて、好きでもない男に無理矢理ふれられているのに、気持ちいいわけないでしょ？ 身体を委ねるなんて論外よ」

「それは残念です」

前を向いたまま、力をこめて言ってやったが、彼は全然こたえない。残念といいながら、喋り方は全く残念そうではなかった。

「馬鹿にしない ああっ」

手のひらが移動した。むき出しの鎖骨を大事そうに撫で、その下から伸びる乳肌の坂道を下る。肌を超える際には、これから更に進みますと言わんばかりに、肌とえりぐりの境界線を小刻みに往復した。布越しの刺激と、肌に直接ふれられる刺激が交互に連続し、みずほの性感を舐めあげる。

「柔らかいです、みずほさんの肌。きめ細かくて、吸いついてくる……こんな肌のおっぱいを直接もみしただけなら、どうにかなっちゃんそつですよ」

賞賛されても嬉しくなかった。不可抗力とは言え、夫以外の男に肌をさわらせている不義を自覚させられる台詞だったから。

束ねられた五指の腹が、タイトなシャツで浮かび上がっている曲線を進みだした。半球型をしたふくよかな輪郭をなぞり、ツンと上向いた頂点へ向かう。

乳頭は、下着を含めて三枚の布に覆われていても形が出ていた。望まぬ愛撫を受けたというのに、身体が反応してしまい、平時よりも尖りぶりが増していた。

だが、指の群れは頂点の根元の寸前で引き返す。服との境目と、まるみ豊かな曲線地帯

を何度も行き来する。

（焦らしているのね……おねだりさせようという魂胆なんだわ）

電車の中での出来事を想起する。彼は、あの大人しそうな眼鏡の子に何を言わせていたか。スラスラといやらしい誘導尋問をしていたではないか。

眉間の奥に力をこめて、意識を強く持とうとする。その一方で、身体は素直に反応を示していた。乳肌に穏やかな刺激が広がって、布の下が次第に熱を帯びてくる。彼は右をしたら左、左をしたら右と渡り歩いているので、二つの乳房がそうなっていく。

「乳首、すごく勃起してきましたね。ここも弄って欲しくはないですか？」

「いらないわ、そんなの……」

そらきたと思い、突っぱねる。が、呼吸が乱れてきたせいで、声に奇妙な抑揚がついてしまった。

「なら、ボクがさわりたいのでさわらせてもらいます」

静かだが、満足そうな声だった。

「ああっ！」

次の瞬間、両方の乳首に鮮烈な刺激が迸った。乳首の真ん中からイカズチにでも串刺しにされたのではないかというほどのものだった。

彼はオーケーサインで尖った乳頭をつまんでいて、そのままコシユコシユと擦り始め

た。時々、自転車の虫ゴムの弾力を確認しているかのような繊細な圧力で、乳首の芯を圧迫することも織りませる。

「んんっ……………あああ……………あふう……………いやあ……………」

衣類の下で、乳首がどんどん熱く重くなっていく。次第に刺激に慣れ始め、ぬるま湯に浸かっている時の陶醉感が頭にかかってくる。

先端の変化はふもとにも伝播している。ブラジャーの押しつけが強く感じられるのは、官能のせいで乳房がわずかに膨張し始めたせいだろう。ムネの赤熱ぶりと窮屈さが、自分が昂ぶっていることを嫌でも思いしらせている。

「身体が熱くなって……………だめ、やめて……………え」

凜としていた美声が崩れ始めていた。唇が牡丹色を濃くし、もう随分と上と下の唇があわさっていない。吐きだされる呼気は、蒸気が見えそうなくらいに熱く湿っている。

「おっぱい、弱いんですね。こんなに立派な巨乳で弱いなんて……………いやらし過ぎますよ」

片手が、女体だけが体現できる複雑な曲線を伝っていく。下乳から腹部。おへそを撫でながら下腹を更に下へ。股間をあっさり通りすぎ、タイトスカートの裾でようやく停止。

「なにをする気……………まさか……………」

真面目な人妻としての良心が、白濁しかけていた心を正気づかせた。悪い予感に蹴り飛ばされて静止の声をあげようとしたが、間にあわなかった。

スカートの裾がめくりあげられた。片手だけだというのに、彼の手つきはよどみなく、あつと言う間に、タイトスカートは裏返されてマゼンダのチューリップにさせられた。パントリーストッキングに包まれた肉の船底が、すっかり露になる。

「いやあああつ　あうっん！」

悲鳴をあげるみずほ。だが、最後は甘ったるい響きを宿していた。すりすりすり、すちゅっ、すりゅすりゅ。

正吾の指が胴底に咲く花卉の谷間に滑りこんでいた。中指と人差し指をまとめ、手のひら側でしつこく擦りあげる。花の色は派手な芍薬色らしい。パンティストッキングの夜空色がかかっている、燦然としている。

「おま　この入り口の肉びら、ふにふにしている触り心地は抜群です。若い子では味わえない感触ですよ……それに、ふふふ、色鮮やかなレースの下着がとてもよく似合ってますね。眼福ものですけど、はっきり言って驚きもあります。真面目で正しい女性……立派な主婦で母親なのに、こんな男殺しの下着を身につけているだなんて。ただ食事を作りにくるだけで、こういうものをはいてくるのはどうしてです？」

「勘違いしないでよ……たまたまよ……今日はそういう気分だっただけで……」  
視線を斜めに下げて、あふんうふんとあえぎながら、途切れ途切れに弁解する。顔が赤いのは、押しつけられた性的興奮だけでなく、羞恥からもきているのだらう。

「やっぱり、みずほさんはいやらしい女性だ……ショーツも大分湿ってきてる」  
「ビリイイイイ！」

正吾は、スナック菓子の袋を破る具合に両手でパンストを引き裂いた。へその下から船底にかけての微細な圧迫感がみるみる消えて、代わりに清涼感が押しよせてくる。

「ああっ、だめえっ！ つうつ、指がはいつてくる……うッ」

ショーツのクロッチを脇にどけ、肉溝を擦りたてていた指が進入してきた。お腹側に向かつて鉤状に曲がり、指先と第二関節とが描く平面的な傘で膣の内部を引っ掻いている。

「やわらかいおまこです……いやらしいトロトロの汁どんどん出てますよ。ほら、聞こえるでしょう？ ぬちゅぬちゅと、泥の水たまりを踏みしめるような音が……ああ、みずほさんみたいな綺麗で素敵な奥さんが、こんな風になってるなんてすごく興奮します」

みずほの頬に自分の頬をよせながら囁く正吾。同時に行う指の動きは悪辣だった。まるで恋人を慈しむような繊細な愛撫で、どんどん快感を感じさせられる。

「だめ、だめえ……だめなお……」

凜と緊張していた目尻が徐々に丸みを帯びていく。一度は復活した凜声も、しどけなく崩されていく。

「ねえ、みずほさん……そろそろ欲しくくないですか……」

お尻に、硬くて熱いものが当たる。正吾は腰を前後に振幅させて、その存在感をアピ

ールしてくる。正体は考えるまでもない。九十九正吾の勃起ペニスだ。自分のペニスを意識させ、欲情している自分を誘惑している。

「わ、わたしは夫が……家族がいる身なのよ………」

まだ墮落しきっていないみずほは、息も絶え絶えに反駁する。物欲しそうにゆるゆる腰が動きだしたのを、意思を総動員してとめながら。

「でも、ボクには逆らえないじゃないですか……だから、ここで欲しいと言っても、あなたのせいじゃない。悪いのはこのボクなんだから………あなたが、家族を守るために、卑劣なボクが気に入る台詞を口にしても、自然なことで、何ら責はないんです」  
そつと心にふれるかのような優しい声音だった。

（そ、そんな詭弁……… ああ、でも………アソコが熱くて………疼いて………）

どんな理由があれ、夫以外の男に情けを請う台詞を吐くことは乱倫であると思う。身体を発情させられ、相手が伴侶であるならば一も二もなく口走ってしまいそうな状態なのに、あとになってから、あれはおためごかしでなかったんです、と誰に対しても胸をはって言えるのか？

「我慢することないんです。全部ボクのせいになればいいじゃないですか。実際、悪いのはこのボク一人でしょう？」

膣の中で指をピンと伸ばし、先端がふれた場所を細かく引っかく。奥に広がる子宮口が

くすぐられるようなもどかしさに、みずほはブルリと身震いした。

（わ、私が悪いんじゃない……………）

胸中で行われる独白も、氣息奄々だった。

（この子が無理矢理してきたから……………ずっとひとりだった身体が刺激されて……………この子が何もしなかったら、何もなかったのよ……………だから）

自分に非はないのだ。

心の中で言い聞かせ、みずほはおずおずと唇を動かそうとする。ぼつてりと腫れて具合の悪さを感じたので、上唇を一舐めしてから、

「ほ、欲しいわ……………」

声は情けないほど上擦っていた。あの日、電車内で彼を叱りつけた時の威勢も、強さも影もない。

「何が欲しいんです？」

やっとの思いで搾り出した言葉への返答は、白々しい質問だった。

カツと頭に血がのぼるが、それで身体がしらぶに戻るわけでもなかった。

このままでは収まりがつかない所まで、誰かに慰めてもらわなければならぬ所まで昂ぶらされていることを、彼女は嫌と言いたいほど分かっている。だから、言い直した。考えて、彼が待っているであろう言葉を紡ぐ。



「あなたのペニスを、私のアソコに入れて、気持ちよくして欲しいの……………」

「……………まあ、いいでしょう。お引き受けしますよ」

正吾はみずほの肩と纏めた膝の裏を抱えあげた。いわゆる『お姫様だっこ』だった。向かう寝台は、食卓の役目を果たしたテーブル。そこに仰向けに寝かされる。

「それじゃ、これをつけてくれますか？」

ズボンのポケットからちっぽけな箱を取りだし、その中から平べったいパックをつまみあげた。コンドームだった。

「こんなものを私につけさせようというの？」

「おや。ひよつとして、ナマでよかったですか？ いやあ、これはありがたい」

「ち、違う！ そう言う意味じゃないわ……………分かったわ、ちよつと待って」

上体を起こす。正吾はスラックスを盛りあがらせて仁王立ちして動かなかったので、きつとズボンも下ろせということなのだろう。

男のズボンに手をかける、その男の前でスキンを手取る。それらの行為は、これから夫以外の男とセックスするということ意識を強くさせた。

夫への負い目と、乱倫を働く罪悪感で心臓が締めつけられる。だが、それ以上に身体を冒している男への希求心が身体を動かした。

「きゃっ……………これって……………！？」

スラックスと下着をずり下ろすや否や、いきりたったペニスが飛びだしてきた。腹にくっつきそうなほど反り返るそれは、夫のものを凌駕していた。

全長は二十センチ、径は四センチはあるだろうか。先端の皮は捲れていて、亀頭冠の下でまとまっている。むき出しの亀頭は紫が濃い赤紫色をしていて、竿の方も薄く黒ずんでいる。女のヒダを引つ搔くカリ首は、椎茸のように鈍い角度で張りだしている。

(すごいわ……………こんなもの、私の中に入るのかしら……………)

恐ろしいと思う一方で、肉欲と結合した期待感に胸が妖しくトキメイてしまう。

みずほは、片手で伸び放題の陰毛をしげみまで押しつけながら、もう片方の手で、封を切って取りだしたゴム板を、鈴口に密着させる。向かいあう指の側面で精液だまりをつまみながら、するすると下ろす。肉幹を走る血管がドクドク脈打つ感触と、肉棒が発する熱波が、手に伝わってきた。

ふと見ると、彼は目を輝かせていた。

「そんなに、私にコンドームをつけてもらうのが嬉しいの？」

「はい。凄く気持ちいいです……………みずほさんの指は細くて、興奮していても少しひんやりしていて素敵です……………頑張ってる主婦の手でもらえてると思うと、ちんぽがもつと元気になっちゃいますし」

確かに、ペニスはビクンビクンと嬉しそうに跳ねている。これが夫であるならば、素直

にはにかめるのだけれど、相手は下劣な男の子。自然と顔に出かけた喜色を、無理矢理に  
憮然としたものに変えるみずほ。キツと睨みつけ。

「あんまりいやらしいことは言わないでちょうだい……これは脅されて、仕方なくしてる  
んだから……勘違いしないでよ?」

「分かってますよ……ボクに脅されて無理矢理ですものね……だから、ボクも勝手か  
つ無理矢理に、コンドームをつけてもらったお礼をさせてもらいますね」

仰向けの女体の正面に回りこみ、根本を押さえながら、人妻の股間にペニスをピタリと  
当てる。亀頭の先端にクロツチを引っかけると、そのまま腰をグイッと突きだす。

「ッう!」

ゴムをまとった熱い肉棒が、膣肉を押しつけて進んできた。進行は早く、みるみる肉棒  
の存在感が充填されていく。

「ああっ……ああアアアア~~~~!」

何ヶ月ぶりかで満たされた膣内。進入してきたものは、いざ膣内に収まると、見た目よ  
りもずつと長く太く硬く感じた。

「気持ちいい……どこまでもそうつとまとわりついて、締めあげられる感じで……  
……おま このヌルヌル感もたまらないです……でも、少し生硬かな……大分ご無沙

汰だったみたいですね……辛かったんじゃないですか?」

「そ、そんなこと……………アアッ!」

亀頭の先端が子宮口と密着し、そのままググツと押された。根本から最奥まで、すっかり征服されてしまったらしい。

「ほら。こんなに敏感じゃないですか……………身体を持って余していたんでしょっ?」

太ももの付け根をガツシリ掴み、身体を自分の方へ引き寄せる。クロツチの間から覗くふくよかな花卉が、ペニスのふもととくつつく。結合部の隙間からとめどなく流れる恥蜜が、彼の草叢をしとどに湿らせている。

「欲しいと告白してくれて、コンドームもつけてくれましたから、寂しさを蕩けさせてあげますね。堪能してください、みずほさん」

正吾は腰を動かし始めた。バージンを捧げてくれた恋人を慈しむような緩やかな抜き差しが繰り返される。

(これって……………すごい……………ゆっくりなのに、頭が痺れて……………)

気力がそぎ落とされていく。みっちり詰まった肉の棒は、内部で更に膨れていた。肉傘がグググと張りだして、人妻のヒダを引っかいている。ヒダ自身も、夫でない男のペニスに吸いついて、引っかかれる快感を大きくしている。

子宮口をトンと叩かれる時には、みずほにとってはドスンと突かれた気になった。震動は子宮にも伝わって、お腹の底から揺さぶった拳句、頭の芯までのぼってくる。

ずちゅっ、にゅちゅっ、ずにゅっ、じゅぶぶぶっ。

(あああっ……頭が真っ白になって………あんんッ！)

腰振り速度が上昇してきた。傘の開いたペニスが抜かれる度に、多量の恥蜜がかきだされ、食卓に水たまりを形成する。愛液の匂いは、下腹から伝ってくる汗と混じりあい、ぷんと濃厚な発情臭をくゆらせる。

「ああっ、すごいっ、すごいいいい」

甘ったるい吐息を撒き散らしながら、みずほの両手が宙を泳ぐ。そこに正吾の上体が降りてくると、迷わず背中にしがみついた。

「気持ちいいでしょ、みずほさん、欲しいって素直に言っただけでしょう？」

肩のうしろに手を回し、みずほの鼻先まで顔を近づける。頬がたるみっぱなしの人妻とは対照的に、彼には余裕があった。額に汗を滲ませている程度で、他の部位は普段と変わらず、不敵に微笑みさえして彼女を見つめている。

みずほはコクコク頷いた。この瞬間、頭の中は快感で麻痺させられていて、夫のことは締めだされていた。常識的な人妻という仮面が外れ、男とのセックスに悦ぶただの女に成り果てていた。

「ほら言っつて、気持ちいいっつていうんだ」

「気持ちいいっ、あんんッ、きもちいいっ！」

叫ぶ度に、身体がふわりと軽くなる。身を包みこむ官能が醸造されて、陶醉の深みにはまりこんでいく。

「ふふふ……そろそろイキそうだね……締まりが凄くキツイ……そら、今度は『イク』だ。思い切り叫ぶんだよ、みずほさん」

「イクツ、あんツ、イクツ、イクウツ」

快感で酩酊した頭では逆らう意識も集まらない。みずほは促されるまま、自分が達すると、夫でない男に自身のふしだらさを熱弁する。

破れたパンストの太ももが、正吾の尻を強く挟みこむ。呼吸はせわしなく、彼の顔に向けてはあはあと熱く湿った空気を吐きだす。彼の呼気もぶつけられているのだが、それは全く頓着しない。憎むべき相手の吐息なのに。

「そら、イクんだみずほさんっ！」

「クウツ、イクツ、イクウウツツツツツ！」

めりこむほど子宮口を突かれた瞬間、みずほは高らかに自己申告しながら、盛大にのけぞった。後頭部と尻でブリッジし、ビクビクと身体を痙攣させる。肉栓をされている花卉から、愛液がブシュツと噴きだされ、正吾の股間をしとどに濡らした。

顔は真っ赤だった。透き通るような乳白色の美肌が茹であがり、汗の膜がかかることでしっとりとした艶を帯びている。法悦の涙をためた目は、しどけなく垂れていた。電車の

中での非常識を咎めた正義漢の凛々しさは影もない。頬や額に貼りついたほつれ毛が、無様さに拍車をかけている。

やがて、ぐったりと弛緩するみずほ。射精で吐きだされる精液が、スキンの精液だまりにどんどんたまっているのを子宮口で感じながら、肩で息をする。

(私……なんてことを……………)

行為がひと段落したのを契機に、少しずつ正気が戻ってくる。

夫でもない男に乱れてしまった。しかも相手は脅迫してくる未成年。そして、自分にしてみれば制服と言える普段着とエプロンを着て、情交に及んだのだ。

伸しかかる罪悪感と汚辱感。だが。

ぬぶんつ。

「あんツ」

射精を終えた肉棒が引きぬかれた瞬間、思わず甘い声をあげてしまうみずほ。開放感が、奇妙な快感だった。

(な……惨めで悔しいって思ったのに、私はなんて声を……………！)

「うはあ、みずほさんのいやらしい汁でべっちよりだ」

そちらに目があった。肉棒を包みこんでいるコンドームが、根本から精液をためこんだ先端まで、愛液でベトベトになっていて、光を反射してヌラヌラと鈍く光っている。

(なんていやらしい……………)

みずほも思わず同意してしまう。そして、多量の精液を封入して重たそうに垂れている先端に釘づけになっていた。



# 第一章 夫以外の男に開発される巨乳

「あふう……………んんっ……………うはあっ……………」

昼下がりのキッチンに、みずほのくぐもった声が響いている。正義漢の人妻は、脅迫で肉体関係を強いる未成年になど屈服するものかと、鼻の頭に皺をよせている。

「我慢しないで、出したいだけ声を出した方がいいですよ。快感で叫んでしまうのは身体が必要としている生理現象で、それをしないのは身体に負担がかかるということですよ」

食卓の椅子に座らせ、うしろ手に縛って動けなくしたみずほに囁く正吾。最初に性交渉をした時と同じく、椅子を挟んでうしろからくっつきながら彼女の胸を責めている。

みずほの格好も、初めての時と同じだった。身体のラインにピッタリ吸着しているだいたい色のシャツに、真っ白いエプロン。マゼンダのタイトスカートに、網目の細かいパンティストッキング。髪を束ねるリボンも相違ない。

服装は全て正吾の指定だった。忌まわしい思い出が染みこんだ物など捨ててしまいたいのだが、弱みを握られている以上は拒否することなどできやしない。

「いやよ……………身体は好きにさせるけど、心までは……………私がいやらしい声を出せば、あなたは嬉しいのでしょうか？ だったら、絶対にそんなことしてたまるものですか…

…くうっ……」

「この間は、あんなに叫んでくれたじゃないですか……すごく綺麗で、いやらしい歌声でした……今さら見栄を張っても仕方ないでしょう？　また聞かせて欲しいんです」

束ねた五指で、むき出しの鎖骨から尖りだした乳頭までの間をそうつと撫であげながら声をかける。しかし、みずほは応えない。気を抜けば荒らげてしまいそうな呼吸を、必死になつて小さくしている。

確かにあの時、みずほはあられもない姿を晒してしまった。夫でもない未成年に対して。その事實は、悔しさというよどみとなつて、心の中にこびりついてしまっている。

それがとても痛かった。半ば、自分から求めてしまつたということも、自己嫌悪を強くしている。

苦しみから解放されるには、同じ状況で彼の鼻をあかすしかないだろう。過去の自分が犯した過ちを、今の自分が犯さない。そうして、自分の正しさと強さを確認できれば、きっと自分は自分を許せる。苛んでくる感情は綺麗に溶けてなくなるはずだ。だから、みずほは意地を張つて耐えていたのだ。

「しょうがないですねえ」

歯をくいしばる美麗な横顔に嘆息すると、正吾は中指と親指でオーケーサインを作る。みずほ小さく息を呑んだ。前回、乳首を弄られて散々あえがされた記憶が蘇っていた。

(でも……今度は負けないわ)

胸の中で固く決意する。それを見透かしたように、正吾が口を開く。

「いっておきますけど、前の時は挨拶がわりです。みずほさんのおっぱいがどうい感じなのか見る程度のもので……準備運動みたいなものでしょうか」

「え……挨拶がわり……準備運動……?」

信じられない説明に、呆け声でオウム返しする。自分は、その程度のことであんなに心を乱された?

「じよ、冗談でしょう? あなたよりもずっと年上のあの人よりも、何倍もいやらしくふれてきたのに、まだまだ序の口だったですって?」

反駁は悲鳴に近かった。回る範囲で首を回し、うしろにいる学生を見やる。

「その通りです。なに、すぐに披露しますから、期待してください。おっぱいの楽しみ方や悦び方は多種多様なのです。みずほさんのみみたいな、立派でいやらしい巨乳なら尚さらに」

オーケーサインに乳首を挟みこむ。両方だった。そのまま前回と同じく擦りだす。

みずほはゴクリと喉を鳴らした。見たところ前と同じ手管だけれど、これから一体どうなるのだろう。彼は今も自信たっぷりで不敵に笑っている。自分は果たして耐えられるのだろうか?

(んっ……………乳首が熱くなつて……………胸が凄くドキドキしてきた……………)

摩擦で火を起こそうとしているかのようになり、しつこく擦られている内に、尖っていた乳頭が更に硬く膨張する。擦られる表面積が大きくなると、摩擦される悦びも大きくなり、乳房の内部に広がっていく。

興奮に伴い心臓の動きも活発化し、胸の奥がせわしなくトクントクンと鳴っている。肌からは汗が滲みでて、表面に膜をかけはじめていた。

「気持ちいいですか、みずほさん？」

「こんなの……………大したことはないわ……………大言壮語だったってわけ？」

涼しい顔では過ごせないが、千々に乱れさせられるほどでもない。

「ほうほう、余裕ですねえ」

「ええ、これ位ならどうということはないわ……………前回の慣れちゃったんでしょね。大人をあんまり甘くみないでよね」

勢いに乗って啖呵を切るが、彼はひるまなかつた。それどころか、

「くつくつくつ……………『慣れた』ですか……………つまり、あれ位では満足できなくなつたと」

「ちがうっ！ そういう意味じゃ」

「そうですね、大人の女性にお相手をしていただいているのですから、そろそろ本格的に始めましょうか。すみません、みずほさんの貪欲さを見誤っていました」

「だから、ちがうウンツ！」

否定の言葉は、後半に嬌声にさせられた。乳頭を挟んでいた二本の指が下にずれ、乳輪の円周あたりを強く圧迫。乳輪がムニユリと盛りあがったところで、突出させられた乳首の頂上が、中指の爪先で押しつぶされた。

下から突きあげられているので、乳房の内部へめりこむことは免れているが、代わりに乳輪の上に押し倒されている。上から伸しかかる爪先は、なぎ倒された肉の柱をコロコロと転がす。

乳房の先っぱが焼かれているかのように燃え盛り、胸の奥に起こる圧迫感が切なさめいてくる。

「あふうっ……………いやあ……………こんなのもって……………んフンツ……………」

恥声が自然にこぼれてしまう。眉間に皺をよせて必死にこらえようとしても、無理矢理に乳房の中へ押しこむように乳頭を潰されると、あふうんうふんと甘ったるい声が漏れでてしまう。

「声、でちやいますね……………その調子でだしちやうといいんです……………声をだした方が快感を楽しめるでしょうっ？」

立たせた乳首を爪先でトントン叩きながら正吾が囁く。エプロンとシャツとブラジャーの三枚の壁が間にあるというのに、乳首や乳房だけでなく頭の中までシェイクされるかの

ような振動が伝わってくる。

「ちがうのっ……これは驚いただけで……… ああ………」

紅潮した頬をさらし、目を潤ませながら負け惜しみを吐くように弁明する人妻。

「なるほど………では、楽しんでいただけようにもっと励ませてもらいますね」

言葉の意味を理解する前に、みずほは拘束を解かれて椅子から立たされた。膝に力が入らず、彼の支えなしでは立てそうになかったのに愕然としながら、されるがままに床に仰向けに寝せられる。

正吾はみずほの両手を頭の上にあげさせると、エプロンを脱がせ、シャツの裾を捲りあげた。

「いやっ、やめなさいっ！」

まわりついてきた空気の冷たさで、みずほは意識を取りもどした。情事がはじまるまで、冷たいとは思わなかった空気の温度が、自分の火照りぶりを自覚させた。

正吾の手はとまらない。怒鳴られているというのに、楽しそうに目を細めて作業を続ける。ほどなくして、ブラジャーが姿を現した。

「前はブラまで見てませんでした、白をつけてきたんですね………エプロンと同じ純白のハーフカップブラ………芍薬色のショーツもよかったです、このブラジャーも清楚なみずほさんによくお似合いです」

穴が開くほど熱視してくる。みずほは下唇を噛みながら首をかしげた。そんなことをしても、彼が悦びそうな悔しそうな顔は丸見えだと分かっていたが、他にどうしようもない。

「ムツチリとした胸の谷間が汗ばんでいて……すごくいやらしいです。蒸れやすい谷間だけでなく全体的にしっとりとしていてとても綺麗ですよ」

「……あなたに素敵だなんて言われても嬉しくないわ……例え、私の胸を初めて褒めてくれた男性があなただったってことを差しひいても、夫が言ってくれた方が何倍も違う感じかたをしたでしょうね」

楽しそうに品評する彼を鼻じろませたくて悪態をつく。すると、正吾はおやと眉を跳ねあげて、胸から目をそらしてしげしげと顔を見てくる。それまでの好色な目とは一転して、探るような目つきだった

「……なによ」

「いえ、何でも……そうそう、乳白色の肌が桜色づいてるのも、男好きする魅力的なところですよ」

「だから、あなたに言われても何ともないって言ってるの!」  
改めて拒絶する言葉を放つても、彼にはこたえた様子がちつともない。また、心底嬉しそうな薄笑いを浮かべて覆いかぶさってきた。

背中 hands を回し、手探りだけでブラのホックを探し当てると、それを外した。決壊させた布の防壁を、肌を伝わせながらおへその辺りまで下ろす。

「ああ……………すごくいやらしいおっぱいだあ……………」

恍惚とした声で正吾が賞賛した。全容を現した巨乳は、仰向けになっても重力に負けていなかった。スライムみたいに流れることなく、円錐型を保っている。服の上からは半球型に見えたのはブラジャーの補正によるものだろう。

二つの乳房は量感たっぷり、うっすら浮いている肋骨の上にどっしりと構え、身体の正中線を境目におしくらまんじゅうを繰り返してひろげている。尖った乳頭はそのあおりを受けて、ツンと上向きながらも正面ではなく外側を見させられていた。

乳輪も乳首も鮮やかな鶉色。歳をとれば黒味がかかるのが一般的なのに、乳房はこんなに熟れているのに、うら若き乙女のような清楚ぶりだった。

乳輪の広さは、成人男性の親指の腹の広さの一、三倍、尖った乳首は小指よりも一回りは大きかった。

エプロンにシャツにブラと、三重に押しこめられていただけにムネの蒸れぶりは甚だしい。目につく範囲では、他の部位よりも汗を吸ってツヤツヤしていて、ぷくんと甘酸っぱい体臭を漂わせている。

「このモチモチ感……………張りのよさ……………若い女の子にも、ここまでの子はなかなかいません



よ……………それにすごく柔らかい……………指が溶けて消えそうです……………」

手のひらを広げて鷲掴みにして、モニュモニュと揉みながら、正吾はいちいち評価する。指を食いこませて乳房の中に谷間を作り、指をゆっくりと上昇させてどこまで乳肌がくっついてくるか確かめている。

(うう……………やだ……………胸が……………感じちゃう……………)

指をうめられると、呼吸が苦しくなる切なさ、肌を上空に引っぱられるとチリチリとしたもどかしさが募っていく。

胸でまだこんな気持ちにさせられるのかと驚いてしまう。考えてみれば、今まで胸を弄られていたのは服を着たままでだった。間の布で刺激が薄められていたはずなのに、自分は何度も恥をかかされた。もし、直接的に責めたてられたらどうなってしまうのだろうか。

「ふふふ、想像以上にいいおっぱいです……………たくさん、感じさせてあげますからね」

ニンマリと微笑む正吾を、みずほはとても年下の未成年とは思えなかった。息子はもとより、自分や夫よりもずっと年上の、酸いも甘いも噛み分けた老獪に見えて仕方がない。畏怖さえ感じてしまう。

「いやっ、やめて……………これ以上、私を辱めないで……………」

ほのかに甘い凜声が、やけに弱々しかった。

「怯えなくていいんですよ。痛めつけたり傷をつけたりするわけではないんですから。絶

対に……ボクにはそんな趣味はありません」

うそだ。肉体的な苦痛や外傷を与えることはしないかもしれないが、心はどうだ。貞操を守るうとする健気さを酒の肴にして喜んで、身体をいやらしく反応させて知らない境地へ先導しているではないか。

「ひいつ」

おののくみずほへ、雷でも怖がる子供を見るような目を送りながら、正吾は静かに乳首を口に含んだ。顔とは裏腹に、口内へ消えようとしている先端は、これからされることを楽しみにしているかのように、ビクビクと震えていた。

「んっ……………あつたかくて……………ヌルヌルしてる……………やぁ……………」

正吾の口の中は、ぬくもりと唾液の又メリに満ちていた。唇をやわやわと動かしながら、ぷっくり膨れた乳輪を刺激し、舌で乳首の外周をねっとり撫で回す。

「だめっ……………やっぱり感じちゃう……………嫌なのに……………」

背筋が弓なりにしなり、鎖骨から下が蕩けているように麻痺している。もう十分に充血していると思っていたのに、乳首は更に硬く熱くなっていく。

膨らみ続ける乳頭の頂上が、丸めた舌の、尖りぶりを増した先端に突かれる。服の上からされたように、なぎ倒されて、転がされる。唾液の又メリが悪辣な緩衝材の役目を果たし、感じさせられる快感は、胸の奥に染みこんで堆積する類のものだった。

身体がますます熱くなり、刺激に対する欲求が強くなる。奈落の底へ引きずり落とされていると意識させられる。心を穢される危機感が生じて、それで反骨精神が湧き起こってもすぐに霧散してしまう。収支マイナスで、転落させられていく。

「あぁっ……ヌルヌルのコリコリで……あふう……いけないのに……」  
目尻と口元を舞台に、悔しさと悦びとが綱引きを繰りひろげている。蕩け顔の中に未練がましく居すわろうとする凜々しさが、被虐的な淫靡さを描いていた。

「今度は引っぱりますね」  
宣言すると、男の勃起ペニスなみにしこっている乳首を唇でつまんだ。保険として突出している部分を前歯で軽く噛むと、そのまま上空に向かってあごを上げる。

あばらの上に乗っていた巨乳が離陸を始めた。重しをよけられた途端、封じこめられていた体臭がむわんとくゆる。ずっと密閉されていただけに、濃厚で、みずほの鼻腔にもおしよせた。彼女は自身の匂いを嗅ぎながら、乳房がお寺の鐘の形になっていく様子を呆然と見ている。

もう片方の乳首には手が添えられていた。親指と人差し指の腹をかぶせ、すり潰すように軽く擦りたてている。

パチンツッ！

正吾が口を離れた途端、持ちあげられていた乳房が落下し、あばらを打った。不時着と



同時に、もう片方の乳房の乳首が、指の腹でキュツと強く圧迫されながら、伸びる限り上へ伸ばされる。

「アア　　ッ！」

目の前が真っ白になり、背中が弓なりに反れて軋んだ。背中が床におりると、また乳首が口に含まれて上へあげられる。その間、もう片方の乳頭は表面だけを指紋で擦られる。

パチンツ！

甲高い音が鳴り響き、数瞬おくれて桃色の叫びが迸る。余韻を残して不随意的な声がやみ、背中が床につく。その時、みずほは長距離を走りおえたばかりのように肩で息をしていた。緩いウェーブがかかった髪がほつれ、額や頬にへばりついている。顔は桜色を通りこして真っ赤だった。

「大分、大人しくなっちゃってますね。素直に声もだしてくれている……記念に、そろそろイかせてあげますね、みずほさん」

粘っこい痙攣を見せる太ももの間に自身のそれを割りこませ、マゼンダのタイトスカートの中の正中線にべったりつける。

「うは、スカート越しの感触でもまる分かりだ……もう、ぐしょぐしょなんだねみずほさん。ムネ、そんなに気持ちよかつたんだ……旦那さんでない男にもてあそばれて、すごく感じちゃったんですね……いやらしい」

唇が動いたが、声がでなかった。もう、反駁する気力もろくない。

「くっくっくっ……叱りつける元気もなくなっちゃったんですか？」

花卉のあたりにじわじわと圧力がかかってくる。

「こうするとどうです？」

携帯電話のバイブレーション機能のように、正吾の太ももが小刻みに震動し始めた。

「あっ、あんっ、あああっ、あゝあゝッッ！」

「ふふ、流石にクリトリスを刺激されたら声はでちゃいますよね……ああ、いい声だ

……普段は芯の強さを伴った凜々しい声なのに、今は動物っぽいあえぎ声で……すごいやらしいですよ」

再び乳首を口に含み、上空へ吊りあげる。同時に、空いてる乳首を指の腹でつまみ、コシユコシユと擦る。

「だ、だめっ、いまそれをされたらっ、あっ、どうにかなっちゃっ、やめてえっ」

太ももに責められて、クリトリスもひどく勃起している。乳首と陰核のどちらかだった場合でさえ、気をやるのは時間の問題というレベルの責めを受けているのに、それを同時にされたのであれば、きつとまたふしだらな姿を、夫以外の男性に見られてしまう。

絶体絶命の危機に瀕し、弾かれるように哀願したが、正吾はとりあわない。乳房は少しずつ上昇している。









つもありませんか？ それに、弱みを握らせてもらっているの、嫌がられてもじつくり見させてもらいますけどね」

水滴で曇った鏡に映る正吾はとても嬉しそうだった。何を言っても無駄と思い、慚然とした面もちでみずほは口をつぐんだ。気にしてもしょうがないなら、気にしないでおう。そう、心に決めて。

失神から覚めた時、汗でべたべたになった身体を流さないかと正吾に言われ、こうして彼の家のお風呂に共にいる。彼との入浴など、みずほは願い下げだったが、弱みをちらつかされては断ることもできなかった。

みずほが家へ来る直前に入浴していたということで、風呂が沸くのはすぐだった。一緒に脱衣所で服を脱いだ。裸に近い格好を既に見られていても、顔から火が出る思いだった。いちいちカラダを褒めてくるのも、それに拍車をかけた。

「はあ〜湯加減はいいし、目の前にはお美しいみずほさんがいるしで言うことないですよ。幸せです」

浴室は七畳ほどの広さだった。浴槽はその半分ほどを占めており、二人の大人が入室しても窮屈ではなかった。風呂場はよく掃除されていて一片のカビもない上に、タイルが欠けている部分さえ見えない。裸を見られていることに目をつぶれば、居心地はよかった。

「ほんとに白い肌ですねえ。しかも染み一つない。カラダのそこかしこは、男なんかには

真似できない柔らかなラインでできていて。それでスタイルもいいんですから、旦那さんが羨ましいです。もちろん、家事万能で気立てもいいという点も魅力的ですけどね」

「ちよつとお……いい加減、大人をからかうのはよしなさい。気が散ってしょうがないじゃないの」

「それはすいません。でも、からかってなんかいませんよ。紛うことなき本音です」

と、浴槽内の正吾が背中を向いた。気楽な声を維持しながら言葉を続ける。

「褒められ慣れてないようですね。あいつや旦那さんは、みずほさんを褒めたり、いつもありがとうございますとか、感謝したりしないんですか？」

みずほはキョトンとした。家庭内のことを他人に言うようで一瞬だけ抵抗心が起きたものの、相手は世間話でもするかのように聞いているので、返答しても問題はないだろうと思つて口を開く。性交渉後の爽快感と、身体を流す心地よさで開放的になつていた面も手伝つていたかもしれないが。

「あんまりないわねえ。誕生日とかにはプレゼントをくれたりするけど、そういうのは三百六十五日の内の数日くらいかしら。ありがとうございますとか言われるのは。褒められることは全然かしらね。子供ならともかく、あの子もあの人もいい歳なんだから、改めていう気にはならないんでしょうね」

吐きだすように呟くと、溜飲が下がるのに似た気持ちになつた。ただ、事実をいった

けで、どうしてこんな心もちになるのだろうか？

「思うんですけど、みずほさんは家族とかから褒められたり、感謝されたりしたいんじゃないですかね？」

「え？」

「みずほさんに限ったことじゃないですけどね。大人だって、褒められたり感謝されたりするのは嬉しいもので、だから、そういうのが生きがいになりがちじゃないですか」

口調は相変わらず軽かったが、不思議と黙って聞きたくなる内容だった。

「身体のラインが見える服をきたり、男好きする下着をつけたり、若い子みたいに髪を染めたり、カラコンをつけたりするのも、自分を見て褒めて欲しいという感情の表れなんじゃないかと思います。こういうのは他の女性にもよくあることで、珍しかったり、おかしかつたりすることでは全然ありません。自然なことです。もちろん、男にもそういうことはありますし」

一拍おいて。

「家族にねだってみたらどうです？ 自分の容姿や仕事ぶりへの褒め言葉とか。みずほさんは立派な妻で母であり、記念日には贈り物だってもらえてるんですから、応えてくれると思いますよ。意外に気持ちいいかもしれませんよ？ それで、毎日をもっと楽しく過ごせるようになる可能性だってあります」

「ぷっ……………あはははは」

「なんです？」

「あなたの口から、そんな台詞がでてくるなんて思わなかったわ」

みずほは愉快そうに笑っていた。お湯をかき分けて向きなおり、正吾は鏡の中の彼女を見た。笑いかたに相応しい笑顔だった。

「そうねえ……………考えておくわ。何を言ってるんだ、って笑われたら責任とってくれる？」

「……………はい。ボクなりのやり方で、嫌なことを忘れさせてあげますね」

言うなり、正吾は湯船からでた。隅に立てかけられていたシルバーのエアクッションを床に敷く。それはベッドなみの大きさの代物だった。次いで彼は、シャンプーなどを置いてあるラックから金色の液体が入った透明ボトルを手にとった。中身には幾つもの気泡ができていて、粘度の高さが示されていた。

「それでは、機嫌がよくなったところで、第二戦目の手あわせを願います。これはセックスのオイルなんですけど、これをムネにたっぷりかけて、ボクの身体を洗ってください」

晴れ晴れとした赤ら顔が仏頂面に切り替わり、それでもみずほは言う通り動いた。キャップを空けて、中身を利き手の手のひらにたっぷり垂らす。そして、乳白色と桜色が混在した豊満な乳房に塗りつける。人並みはずれたポリウレームの胸の隅々が、テラテラと黄金色に輝きはじめた。

「ソープって言うやつかしら。聞いたことあるわ」

カラダに塗りつけながら、照れくさそうに言うみずほ。悪態をつくでもなく、気さくな雰囲気を滲ませていた。正吾は少しの間、目を丸くし、

「分かるのでしたら話は早いです」

マットに仰向けに寝る。ペニスは既に興奮していて、潜望鏡めいたそびえようを見せていた。

「こうしてよく見ると、意外と筋肉質なのね……セックスばかりが達者の若年ジゴロかと思つてたら、存外そうでもないんだ……考えてみれば、うちの子を負かすくらい、成績もいいのよねえ」

首の下から股間までを金色にした人妻が、学生に覆いかぶさる。

「うわぁ……柔らかくてあつたかい………っっ、気持ちいいっ」

脂がのつた熟れた女体の感触に、正吾が夢見心地で呟いている。裏筋部分を天井に向けられながら、みずほの下腹でべったり押し倒されているペニスが、肌の中で嬉しそうにビクンビクン跳ねていた。

今まで一方的に責められていただけに、わななかせる側のみずほの喜びはひとしおだった。身体を洗うことなど二の次にして、何度も贅辞を贈られた巨乳で、彼の胸板を幾度も擦りたてる。

「はっ、はあっ、どう、こうしても気持ちいい？ 気持ちいいんでしょう？ 隠したって意地を張ったってムダなんですからね。おちんちんが元気にビクついてるのが、私のお腹に伝わってきて丸分かりなんだから……さあ、いいなさい、気持ちいいって。さあっ」

「気持ちいいです……………みずほさんのもち肌が又ル又ルってして……………ああ、最高に気持ちいいっ」

正吾は身体を強張らせて、命令されるままに言葉を紡ぐ。収まらない勃起の震えが、嘘やお世辞でないことを如実に示していた。

みずほはますます調子づいた。膝と肘をつき、胴体で彼のそれをすっぱり覆う体勢になり、股間から首の下までをダイナミックにしごきあげる。

赤みが強くなった唇から、熱と湿り気たっぷりの吐息を彼の顔に吐きかけて、垂れたほつれ毛でくすぐってやる。すると、憎らしい脅迫者は気持ちよさそうに顔を緩めていた。

主導権を握ったみずほだったが、男の身体をふれあう心地よさは彼女も感じていた。筋肉質の身体特有の凹凸が頼もしく、柔肌に又ルリと引っかかる度に花卉の奥がキュンと疼いた。胸の奥がドキドキして、眼下の男性に愛しさめいた感情さえ感じている。

（調子が狂ったわねえ……………あの人でもない、卑劣な男なのに……………やっぱり、この子のいうことにも一理あったんでしょっね）

自覚したことはなかったが、やはり心のどこかで求めていたのだろう。褒められたり、

感謝されることを。少ない頻度でそうされていては足りない、不満に思っていたとも思う。無自覚を自覚させられる言葉をかけられて、抵抗心が薄らいだのではないだろうか。非常識な振る舞いを忘れたわけではないが、少なくとも今はどうでもよくなっていた。

「ふふ、おちんちん、もう限界みたいじゃない？ このまま射精させてあげよっか？ それとも、あなたが褒めてくれたこのおっぱいで、シてあげる？」

「はい、是非おねがいします」

正吾は名残惜しそうにみずほの身体を引きはがし、浴槽の縁に腰かけた。

「素直でよろしい…………… たあくさんあえがせてあげる」

向かい合う形でひざまずく。急勾配で反りかえる勃起ペニスの上空でオイルのボトルを傾けて、中身を垂らす。毒々しい色のモノも黄金色でコーティングされていく。

みずほは塗り広げにかかった。利き手を筒状に丸め、男が自慰をする要領で、皮のむけた亀頭のとっぺんから、剛毛生い茂る根本までをニチャニチャと何度も往復させる。

「まだよまだ。こんなんで射精したら、息子に教えてやるんだから」

大体の部分をカバーすると、今度は隙間に取りかかった。人口粘液をたっぷりまぶした小指の先で鈴口をほじる。肉傘の裏側、裏筋の終端にある皮のつなぎ目も陰をも見逃さず、文字通り満遍なく塗りたいくる。

「無理です、もういきそうです……………じゅう……………」

「しょうがない子ねえ……………じゃあ、限界を超えないうちに、メインディッシュを味わせてあげるわ」

すり足でペニスの直前まで進むと、両手の指で乳首をつまんで乳房を開かせる。そのまま更に進み出て、オイルまみれの剛棒を胸板と密着させる。乳頭をつまんでいた指が離された。開放された乳房が、ペニスの周囲をその内側の乳肌で覆いつくす。

「うわっ……………みっちりとくっついて……………おおおっ！」

みずほがムネの外側を鷲掴みにして、内側に向けて柔肉の塊をグニグニとうごめかせる。泥の水たまりに足を突っこむような粘つく音が、エコーつきで響きわたる。

「熱いわ……………あなたのペニス……………すごく硬くて……………ビクビクして……………」

によつきりと飛びだした、カリ首から上の様子を、瞬きせずに熟視しながら、みずほが甘く呟いた。苳を逆さにしたような形と大きさの亀頭は、気持ちよさそうに小刻みに震えている。谷間が大きくなった鈴口から、先走り汁が漏れでていて、黄金色のオイルを薄めていた。

二つあわせた乳房の境目に閉じ込めた竿部も、興奮どあいには亀頭に勝るとも劣らない。血管がポコポコと浮きあがっているさまも、血の流入で硬度をあげているようすも、乳肌を通して、目で見ているのと同じくらい明確に伝わってくる。

「いっぱい出してね……………気持ちよく射精させてあげる……………」



カウパーがでていているのなら、限界も近いのだろう。そう判断した人妻は、最高の最後を与えてやろうと行動を始めた。

元来の、甲斐甲斐しく尽くすのが好きな性格を、自分をラクにしてくれるようなことを言ってくれたこの男にも発揮させる。

下から上、上から下へと、左右の乳房を連動させて勃起ペニスをしごきあげる。柔らかかできめ細かく、オイルのヌメリを得た乳肌は、陰毛のしげみの根本から、カウパー汁を吐きだす先っぽまでをあますところなく刺激する。

流体的な肉塊と潤滑油が、とっかかりのない快感を与え続ける。擦られているペニスのどこをよくするというのでなく、ふれたどこもかしこも平等に熱く燃えさせる。

「ああ、もつと熱くなってきた……………射精したいのね……………そうでしょ？」

「はい、射精したいです……………このまま、パイズリで……………うう」

「じゃあ、しなさい……………私のムネでいかせてあげる。イク時はイクと言っのよ？」

男を追いつめていることを楽しみながら、みずほはムネこねを加速させる。粘っこい水音がガムを噛む音と同じく連続的な音楽となり、乳房のひしゃげようが、可動状態のもちつき機の内釜めいたものになる。

「ほら、イク、でしょ、イクって言っのー！」

乳肌の端で感じていた陰囊の存在感が、キューツと縮みあがっている。リードが板につ

いたみずほが、自分も迫られた台詞を強要する。

「ああっ、イクっ、みずほさんのムネで、みずほさんのパイズリでザーメン出るウツ！」

正吾の腰が浮いた瞬間、みずほは乳房を縦長にして、ペニスの全てを覆いつくした。オイル色に染まった柔乳の内部で、ドクンドクンと爆発が起こりだす。

「あああああ………すごい………っ………私の中で、ビュクンビュクンッて………！」

射精ペニスの律動は雄々しすぎて、包みこんでいる乳房だけでなく、胸の奥底までもが揺さぶられている気になった。逞しい男の射精を受けとめているだけだというのに、子宮口がキユンと切なく蠢いた。

吐き出される精液の塊は灼熱の雫だった。剛棒とムネ肌の僅かな隙間に染みこんで、ドロドロ具合を思いしらせてくる。素肌で感じるのは初めてだが、こんなものを膣内に浴びたら一度で妊娠してしまうのではないだろうか、と思わせる若さ溢れる代物だった。

「くっ、くっ、クウッ！」

気がつけば、正吾は躍起になって腰を何度も浮き沈みさせていた。ほとんど、浴槽の縁から立ちあがっている。もっと射精したい、もっと欲望を満たしたいと夢中になって乳肌の感触を貪っているらしい。

正吾の腰つきに合わせて乳房を躍らせてやりながら、みずほは夫に、それこそ毎晩のように愛しあっていた頃のことを思い出していた。

（我慢しないで素直になってみようかしら………やっぱり、褒められたり求められるのは嬉しいし、気持ちいいものね）

## 第二章 ほぐれていく心。育つ貪欲さ

「よくお似合いですよみずほさん」

よく晴れた休日の昼下がりに。予備校の模試にでかける息子を、お手製のランチを持たせて見送ったあと、みずほは九十九正吾の家を訪れていた。

浴室で正吾に促されたことを実行してから、みずほはより充実した毎日を送れている。息子は口癖のように感謝の言葉をかけてくれるし、単身赴任の夫も時間を作って帰宅してくれるようになった。子供の目を盗んで、肌を重ねてもいる。

しかし、未成年の学生との関係は依然、続いていった。

「褒められるのは好きだけど……あなたに言われてもちっとも嬉しくないわ」  
頬を赤くしながらうつむいて、けれどチラチラと彼を見つつみずほは軽口を叩く。

今の彼女を包む布は、主婦のトレードマークたるエプロンのみ。他家のとはいえ、人妻の主戦場ともいえるキッチンで、ウブな少女のように恥ずかしがりながら、魅惑的な肉付きの身体を面積の小さなそれのみで覆っている。

乳房の外側は大きくはみだし、純白の布がかかった中央では、ツンと上向いた乳首の輪郭が浮きでている。腰に巻きつけられた紐が括れの細さを強調し、前垂れの役目を果たし

ている部位は、マイクロミニなみのチャイナドレスと化している。太ももの側面を大盤振る舞いさせ、身じろぎしただけでも、三十路超え人妻の秘部がチラリとのぞく。

「それは残念です」

ニヤニヤといやらしい笑みを貼りつかせながら、ゆっくりと胸の前で両手を交差させて恥じらっているみずほの前に歩みより、屈む。

ヒラヒラした前垂れ部分の裾をつまみ、のれんをよける仕草でめくりあげた。

「じっとして下さいね……………ふふふ、何ですか、何もしていないのに、もう濡れてしまってますねえ……………ああ、なんていやらしい」

みずほは弱みを握られているので逆らうことはできない。だから、彼女は言われる通りにじっとする。

「ツルツルに剃られて、殻が剥かれた茹でたたまごみたいになるっこくて艶やかな花卉ですけど、おっぱいみたいに肉付きがよくて、いかにも人妻のおま　こという感じですね。パクパクと開いたり閉じたりしながら、トロトロの涎を垂らして……………すごくいやらしいですよ」

乳白色できめ細かい肌がうねる太ももの付け根に、うしろから手を回し、下半身を自分の方へ引きよせる。みずほもすり足で協力した。

「いただきますよ、みずほさん……………夫でもないボクが、みずほさんのおま　こをしゃぶっ

てしまいますよ?」

「ダメといつても、脅してくるくせに」

「ならいいんですね? ボクがおま こをべロべロしちゃっても構わないんですね?」

「す……好きにすれば……逆らわないわよ……」

正吾が持つていた裾を自らつまみ、みずほは股間を露にさせた。

「ご協力に感謝しますよ」

上目遣いで、悔しそうな彼女の顔を見届けると、愛液を垂らす谷間に鼻先を近づけた。キッチン中に響くほど、鼻で息をしながら匂いを嗅ぐ。

「やっぱりこのおま こはいい匂いです……旦那さんも嗅がれるのでしょうか?」

「あの人は……そんな変態的なことはしないわ……」

「なんと勿体無い……奥さんは、ここの匂いをクンクン嗅がれるのが大好きなのに……  
…そういうおねだりはしないのですか?」

「流石にそこまで……それこそ変態呼ばわりされちゃうわ……」  
途切れ途切れに語るみずほの瞳は潤んでいる。

「ペロ……じゅるっ……れろれろ……うん、おま この味も絶品です。この甘酸っぱさと、大陰唇のプニプニした感触や、おま こヒダの柔らかさと絡みつかれる感覚は、使いこまれた人妻のモノならではのですね……旦那さんもそう言うでしょう?」

「……………匂いを嗅がない人が、舐めたりなんてするはずないでしょ？」

「すると、こんなことをするのは？」

「あなただけよ……………」

息のあった受け答えをした人妻が、愛液をトプツと強く漏らすと同時に、ぶるつと身震いした。

「なら、ボクがたっぷり奉仕させていただきます。ちんぽを突っこまれるのはまた違った味わいを、堪能してください」

顔を引き、自分の舌の長さをみずほに見せつける。彼女は熱っぽく視線を降らせていた。それをねじきるように、顔が前進する。舌が死角に入った次の瞬間、ゆっくりと体内に埋没していった。

円柱状のペニスとは違い、舌は扁平状の肉器官。しかも、表面には微細な凹凸が備わっており、唾液という潤滑油がとめどなく分泌されている。

横幅のある舌が、閉ざされていた腔内をこじあげながら奥を目指す。内部のヒダをザラつきで引っかきつつ、滲みでる愛液の味を正吾に認識させる。と同時に、ツバを腔肉の亀裂に塗りこんでいく。

「ああ……………ああ……………ひあッ！そこだめ、弱いからあッ」

お腹側に位置する一点が抉られ始めた。Gスポットだった。それまで保たれていた脆い

気丈さが一気に崩れだしている。

「はあああつ、んああつ、擦られてるっ、ナカの弱いところが擦られてるウツ！」

裾をつまんでいた手から力が霧散した。ゆっくりと落ちて正吾の後頭部を覆う前垂れ部。そこに、みずほの手のひらが覆いかぶさってきた。わしっと強く握りしめ、彼の顔を自分の股間に押しつける。

「あああつ、もつとお、もつとしてえっ」

膝をガクガク言わせつつ、腰をゆるやかに振りたくる。少し前まで見せていた恥じらいを脇に追いやって、代わりに貪欲さを居座らせる。

正吾は手のひらを移動させる。太ももの付け根を出発点にして、腰骨を経由し、尻たぶで落ちつく。身体だけなら大人と同じ年頃の男が、めいっぱい五指を広げてもつかみきれない大きな尻に、全部の指をめりこませる。

脂ののつたみずほの尻肉は、胸にも負けない柔らかさを持っている。実際、握力の限りに食いこんでいる指は、途中で押しかえされることなく、指が曲がる限界まで受けとめられていた。

「んああつ、お尻、いいっ……………もつと強く握りしめてちょうだいッ、跡がついてもいいからあ！」

正吾は応える。勢い余って爪を立ててしまったが、それでもみずほは拒絶の言葉を吐か



なかった。背筋をクンツとのけぞらせ、もっとももっととせがんでくる。

「ああああ……………あんツ……………」

と、彼が力づくで自分の顔を引きはがした。

埋めこまれていた肉が抜かれた快感に、みずほはほうつと息をつく。舌が引きぬかれた拍子に、せき止められていた多量の愛液がポタポタと床にしたたたった。

「みずほさん、そろそろ、もっととして欲しいことがあるんじゃないですか？」

ズボンと下着を脱ぎ、これみよがしに肉棒を見せつける。ペニスはもうはちきれんばかりに勃起して、槍型の亀頭部が彼女をじっと見据えている。

「あああ……………」

涙の膜が張った瞳で夫をしのぐペニスをじっと見つめ、物いいたげな顔をするが、みずほはただ呻くばかりだった。

「隠しても無駄ですよ。こんなならだらだと愛液を漏らして、いやらしい匂いをぶんぶんさせて……………味だって変わってましたからね。身体が、男の精液が欲しい、ペニスが欲しいって訴えているんです。素直になっただらどうですか？」

「ああ、でも……………私は人妻なのに……………他の男性におねだりなんて……………」  
白々しさが孕んだ蕩け声だった。

正吾はみずほと距離をつめる。鼻先まで顔を近づけて、利き手の指をぬかるんだ肉穴

に潜らせた。進入時の水音は酷く粘っこかった。

「みずほさんのおまこが、いやらしくキュッキュツて締めつけてきますよ……指なんかじゃ物足りないでしょ？ ボクのペニスが欲しいでしょ？」

指を鉤状に曲げ、舌でこそいでいたGスポットを引っかきながら、耳元でささやき、その一方で、愛液が垂れてヌルツとする太ももにペニスを押しつけ、腰を緩慢に上下させる。

「はああっ……すごい熱い……ペニスも、アソコも……でも、でもお……」

未練がましさをたっぷりで、被虐感タダ漏れの態度を見せる。

「なら、命令します。おねだりしてください、みずほさん」

「めいれい……ああ……命令されるのなら私は逆らえないから……はああ……」

大好きなお菓子をもらえた幼女のように、みずほの顔が綻んだ。

「そうです。みずほさんはボクに弱みを握られているんですから、言うことをきかないといけないんです……ですから、おねだりして『いい』んですよ」「

首筋に舌を這わせながら、そっと告げる。聞き届けたみずほは、首を粘っこく痙攣させつつ、呼吸を乱しながら言葉を紡ぎ始める。

「あふあ……私のアソコに、あなたのペニスを入れてちょうだい……」

「いまいちですね。こう言う風に言うてください。命令です」

他に誰もいないというのに、正吾はみずほに耳打ちする。ああっ、と絶望的に、だが色っぽく息を吐くと、その言葉を口にする。

「私の……お……おま こに、あなたのちんぽをぶちこんで……ああっ、ぶちこんでえ……私のおま こを気持ちよくしてください……アア ツー！」

言い終えた刹那、正吾はうしろにまわりこんだ。命令とあれば、みだらな台詞さえも嬉しそうに吐く人妻に、待望のモノを一気に突き刺してやる。

「ジユブリツツツツ！ コツンツ！」

「これえっ、やつぱりこれいいっ、あれからずっと、これが欲しかったのオ！」  
アドリブを叫ぶみずほに、正吾が問いかけた。

「やつぱり？ あれから？」

「んんツ……お、夫とセックスしても、あなたのモノが忘れられなくて………構っても  
られない時だって、あなたにセックスされてから、またこうして貫かれないって思ってた  
のオ」

夫との情事で物足りなさを感じ、その原因を考えた末にでた結論だったが。

「ほほう。それは光栄ですね。反抗的な態度をとったり、ムネばかりをしてあげてた時も  
心の中ではボクのちんぽのことを求めていたわけですか」

膣内は柔らかかった。初めてした時は、ご無沙汰な女特有の生硬さを感じたが、今はこ

なれている印象を受ける。それだけ夫と励んだのだろう。

けれど、真面目に家族に尽くす人妻は、他の男のペニスで犯されたいという下心を秘め続けていた。

「いやっ、言わないで……………あぁっ、久しぶりに子宮口がノックされてるう！」

嬉しそうに身をくねらせ、ヒップを前後に振っている。

「旦那さんじゃ、届かないんですかね。子宮が降りてくれば、こういう風にラクに届くはずですし、こういう体勢をとれば、もっと深く繋がれるんですがねっ」

みずほの片手をシンクの縁に導くと、片方の足を持ちあげた。ムチムチした太ももの裏側に手形をつけるつもりで指を食いこませる。空いている手は、尾てい骨に接地させた。肌を外側に引っぱって、間接的に肉穴を拡張させる。

最後に、身体の正中線を走るエプロンを脇によけ、巨乳を転げださせた。

「んんんっ……………ふ、深いいいい……………」

首を仰げぞらせるみずほ。短めの馬の尾にした髪が宙で弾み、裸になった乳房が、ぶるんぶるんと震えた。

「これでよし、いきますよ。いやらしいみずほさん」

正吾は腰を振りはじめ。奥を目指す時には、勃起がそり返る力を利用して、張りだす肉傘でいちいちGスポットをヤスリがけし、とどめに子宮口を突きあげる。子宮は徐々に



降りてきているので、加わる衝撃は子宮を揺さぶるほどに大きい。

腰を引く際には、やはり、意識してGスポットを擦ってやる。抜くのは、亀頭冠から下までのみ。竿が外気にふれる折には、カリ首に引っかけかかって掻きだされる恥蜜がトプツとしたたり落ちていく。

「ああっ、だめえ、そこをそんなにされたらっ、でも、ああッ~~~~~！」

首をいやいやと振りながら、男の腰振りに息を合わせて柔尻を躍らせる。子宮口を叩かれる余波と、人妻のみだらな尻ダンスの震動が、たわわな巨乳を宙で舞わせる。ツンと上向く乳首が、振り子のように曲線的な軌跡を描き、鶉色の残像が生まれては消えていた。

「ああ、出る、でちゃうううう」

極彩色の快感が体内でうねる中、腰の底からこみあげてくる衝動に、みずほが叫ばされた。尿意めいた生理反応だった。ひよつとしたらお漏らしをしてしまうのではないか。

「いいですよ、出してください。遠慮は不要です」

「で、でも、でもお……………」

「命令です。だしてくださいね」

抜き差しが荒々しくなった。その瞬間を早く見たいと言わんばかりに、Gスポットをしつこく擦りながら、子宮口を叩き続ける。

立て続けに叩きこまれる快感で心身が消耗し、みずほは官能を享受するだけの肉人形に

墮落してしまう。

白む頭の片隅で、みずほは満足していた。

もし、本当にお漏らしをしても、命令されたのだから許されるだろう。他人の家、しかも主婦にとっては仕事場といえる神聖な場所でそんなことをしたら、それを夫でもない未成年の男の子に見られたら、どんなに背德的で気持ちいいのだろう。

みずほは、今の家族生活に満足している。けれども、正吾との時間で知ってしまった女冥利は捨てがたいものがあつた。

だから、彼との関係が続けてしまっている。清算しようという気もほとんどなかった。夫が知ったらショックだろうという罪悪感を抱く程度。

「イクっ、イクっ、イクウウウウー！」

力強い出し入れをたっぷり楽しんだ末にみずほは声を迸らせた。嫌われるのが怖くて、夫の前では控えている分もこめて盛大に叫ぶ。

同時に、股間から液体のアーチが飛んだ。膣内では人並みはずれたペニスで、射精の律動を繰り返している。

「ああ……………でてる……………たくさん……………」

呟いたのは、子宮口と密着しながらビュクビュク放出されている粘っこい精液のことか、Gスポットを責められるあまりに出た潮のことなのか。







「妊娠しちゃう……………はあぁ……………」

以前、風呂場で体感した精液は、小麦粉のダマよりもドロドロだった。あれと同じものが膣内を蹂躪しているのだろう。今の体位は、泳ぐおたまじゃくしたちにとっては、重力に引かれて不利なのだろうけれど、あの精液に含まれる若い精子の一つならば、卵子を見つけて突入できて不思議ではない。

もしも孕んでしまったらと思っても、それさえもみずほにはドス黒い快感に感じられた。腰を振ってペニスをビクつかせる正吾の様子が、自分に孕めと命令している気がしてくる。膣内射精を受けているというのに、人妻は嫌悪感よりも心身が蕩けていく官能を覚えていた。

# エピソード

空気漏れみたいな音と共に、電車の扉が開いていく。目の前に広がる人の森を見やったあと、そつと息をつく。三十三歳の人妻、川島みずほはステップをのぼって乗車した。

車中は満員というほどでもなかったが、人は多かった。三十人はいるだろうか。思春期の学生らしき若者もいたが、サラリーマン風の男性の方が多かった。年齢はまちまちで、若々しい十代からごま塩頭の六十代まで網羅されている。ざつとみた限りでは、二十代から三十代の男たちが一番多いだろうか。だいたいは男性で、女性はほんの数人だった。

みずほは、反対側の出入り口の前に立った。出発アナウンスが流れ、ガタンゴトンガタンゴトンが響きだしたところ、視線を感じはじめた。物理的な圧迫感を与えてくる無形の矢は、次第に数を増していく。

（見られてる……………みんなが見てくる……………こんな、普通の格好なのに……………）

今のみずほは、グレイのスーツスカート姿をしていた。満たされた生活を送り始めたせいか、髪染めとカラーコンタクトへの興味がなくなったので、髪も瞳も生まれつきの地の色を見せている。

背中まで届く黒髪ストレートは、毛の一本一本が夜空色にツヤツヤしていて、しかもサ

ラサラだった。周囲には、シャンプーのあとと同じく、清涼感満点の爽やかな甘みを孕んだ香りがふわりと香っている。

鳶色の瞳は、優しげに垂れながらも凛と緊張している目尻、ほっそりした頬、高く尖った鼻、牡丹色で形のいい唇らとの親和性と、働く女性の記号である衣装の効果も相まって、知的な印象を強くしている。

（ああ……………やっぱり男の人は胸が好きなんだわ……………）

以前なら嫌悪感を感じていたが、今では恥ずかしさちよっぴり、女としての優越感がたんまりという比率だった。

垂涎の的のムネは、百センチ近くあり、カップもアルファベットの後方に属しているだけにブラウスやスーツでも封じきれていない。円球型にこんもりと盛りあがっている。

スカートはマイクロミニだった。はちきれんばかりの柔尻がクツキリ浮きあがり、生白くてムツチリと脂ののった太ももが見放題となっている。膝の少し上からは、肌の色をほの見える、細かい網目の黒ストッキングが包んでいて、流麗な脚線美にあだっぽさを付加していた。靴は表面がテラテラの黒ハイヒール。爪先まで靴クリームで磨かれている。

セックスとは無縁そうに見える知的な顔貌と服装をしているにも関わらず、溢れんばかりの女体の魅力を同居させているアンバランスさは、男のフェティズムに大いにかなっていた。漫画やゲームで言うならば、ビキニアーマーで戦う若さ溢れる美戦士や、コケティ

シユなコスチュームで活躍する魔法使いの女の子といったものと、深いところで似通っている。

「あ……………」

うしろの誰かだろう。尻たぶに手のひらを添えると、柔らかさを確かめるように、ほんの少し指を食いこませてきた。指輪をしているらしく、金属めいた硬さも感じる。

ゆっくりと首をめぐらせると、九十九正吾がいた。以前、女性専用車両で見かけた時と同じく、金鎖のネックレスとブレスレットをじゃらつかせ、指には攻撃的な意匠の指輪をつけている。黒いストラップスは何の変哲もないが、白いYシャツは第二ボタンまで空いていて、日焼けした逞しい胸板がチラついていた。

（やっと始めてくれたのね…………）

現在のみずほは、家では良妻賢母をこなしている。しかし、この未成年の学生とも関係が続けていた。正吾との情事で育ってしまった肉欲への貪欲さを、夫でなくこの若者で満足させているのだ。

今日は、髪と瞳を元に戻した記念に痴漢プレイをおねだりしていた。黒髪で鳶色の目のみずほの姿は夫と息子さえまだ知らないし、服装や雰囲気も変えているので、万一、知りあいに見つかっても、彼女だとは分からないだろう。そんな計算も含めて、コスチュームプレイを決行している。

「みんな見てますよ……学生から社会人まで……思春期の男子からくたびれた中年まで……誰もが目もみずほさんのいやらしい姿を楽しんでいます」

胸板をみずほの背中に密着させて耳元でささやく。彼女がはあくつと陶醉のこもった吐息を漏らした。

「毎日を頑張っているかれらに、ご褒美をあげましょうね。彼らの妄想を、ボクが実践するんです……まずはこの、いやらしく育ったおっぱいです」

腋の下から手を通し、スーツとブラウスを前方に押しやっている豊乳を鷺掴みにする。

「ああっ……いきなりこんなっ……つよいい……っ」

皺一つなかったスーツに放射線状に縦皺ができ、ブラウスにも亀裂めいた影が走る。

ムネの奥まで締めつけられる、切なさめいた鈍い快感を感じるみずほの耳に、息を呑む小さな音が立て続けに届く。男性の群れに目をやれば、

あの学生風の男は痴漢なのか？ けど、それにしても女の方が抵抗しないぞ。

あいつの手は小さくないのに、手のひらに全然収まってない……すげえ巨乳だ。

大きいだけでなく、すごく柔らかさうだ……あんなに指がくいこんで……。

こねるように揉みはじめたぞ！ 俺もあのスーツのムネを皺くちやにしてえっ！  
誰もが目もみずほの姿を楽しんでいる。

（私のおっぱいがいやらしく揉まれてるのを、みんなが嬉しそうに見てる……ッ）

欲情で尖った男たちの目が背筋をゾクゾクさせる。ちょっと前までくたびれた風にして  
いた中年さえも、若者顔負けのギラつきを見せている様子に、女としての矜持がくすぐら  
れる。

もつといやらしいところを見せてあげたい。見られて自分も興奮したい。そんなふしだ  
らな熱情が胸の中でとぐるを巻く。

正吾は親指と人差し指の腹で輪を作ると、先端の尖りを挟みこんだ。他の三指は蜘蛛の  
足のようにスーツの巨乳にまわりついたままだった。

「あふう……………んんっ……………はああんツ……………」  
ほのかな甘さを含む凜とした声に、みだらなしどけなさが滲みだす。発情した女だけが  
吐きだせる熱っぽくて湿った吐息が、あたりに空間に溶けていく。

乳首が勃ってる！

指の腹でコリコリって擦られて……………スーツとか着てるのに感じてるぞ！

すごい美人だから、青息吐息な様子が色っぽすぎるな……………。

あのやらしく吐きだされる息……………吸ってみてえ、胸いっぱい……………。

呼吸を荒らげながら、男たちは責めたてられるみずほの様子を熱視する。

「んんツ、だめえ、乳首、よわいのお……………みんなが見てる、のにい……………」

はああ……………すげえ綺麗な声だあ……………。

苛めまくって、あんなよがり声を出させてえ……嘔れるまでさえずらせてえよ。

被虐感ビンビンだ。男を見下すキャリアウーマンっぽいのに、実はマゾなんだぜ。

突き刺さる視線の数々が、みずほを貶め、辱めているように感じられる。けれど、彼女は嫌でなかった。胸の奥をざわざわさせる暗い快感が、気持ちよくて仕方なかった。

そんな時。

「ちよつとそこのキミ！」

いつの間にか近づいていた女が鋭い声をあげた。目は正吾を向いている。

二十代中盤だろうか。黒いスカートスーツをビシリと着こみ、髪をショートカットにしている銀縁眼鏡の美人だった。

みずほほどでないにしろ、身体には女性ホルモンの仕事ならではの起伏があり、ぜい肉はなさそうだった。身繕いにソツがなく、清楚な印象さえ抱かせる。

だが、目がキツイ。理知的な輝きを帯びているものの、同時にヤマアラシ的な攻撃性の色もある。

進学校に入り、一流大学に現役合格し、上場企業へ新卒入社。実力主義が大好きで、男をかきわけのしあがる。そんな野心を胸に抱いて出世コースをまい進中といった感じのキャリアウーマンなのだろうか。

「分かってるの？ あなたがしていることは犯罪よ？ まったく、最近の若い子は怖いも

のしらずで無軌道なんだから。次の駅で駅員に突きだしてあげるわ。いいわね？」

メゾソプラノの鋭い美声がまくしたてた。いい終えて、みずほを見る。強い意志のこもった視線だった。痴漢に身を委ねる汚らわしい女！ と軽蔑されている気がしてならぬ。

「ち、違うんです……」

デジャビュだと思いつながらみずほが口を開く。

インチョウの彼女もこんな気持ちだったのだろうか。大勢の前で悶えさせられるのを楽しみ、そして、助け舟である女性の態度にも、惨めさや異常さを自覚させられてよ。りいつそうの快感を得てしまう。

もっとも、あの時の自分はあの子を軽蔑する気持ちなど小指の先ほどもなかつたけれど。とはいえ、それでキャリアウーマンに憎悪を抱いたわけでもない。むしろ、常識的な感情をぶつけてマゾ的な悦びを感じさせてくれることにお礼をいいたい位だった。

「彼は痴漢じゃないんです……私が、おねだりして、してもらってるんです……」

信じられないという風に、キャリアウーマンは目を剥いた。

森のように大勢いる男たちが、一斉に生唾をのみこんで、ちょっとした喧騒を作りあげている。



「すみません、ご迷惑をおかけしました。でも、次の駅でありますので」

世間話をするかのような気軽い口調で正吾があとを継ぐ。そして、みずほのうなじにキスの雨を降らせながら、

「それまでにイかせてあげるね。心配は不要だよ」

子供をあやす母親めいた口調だった。

みずほは目を潤ませながらコクンと頷く。

立ち尽くす眼鏡の女性を尻目に、正吾がマイクロミニをまくりあげる。乳白色をした量感たっぷりな桃尻があらわになり、肉づきのいい太ももが根本からさらされる。

「ありがとうございます……ございます……」

両手の手のひらの全部を扉にべったりとつけ、背筋を反らせ、尻を高く突きあげる。首の可動範囲でうしろを振りかえった顔は、常識的な女であれば、ベッドの上でしか見せてはいけない表情だった。頬を赤らめ、たるませるままにしている目で男に秋波を送っている。牡丹色を濃くした唇が、まるで興奮した肉花卉のように上下している。

正吾は彼女の尻に近づきながら、スラックスのチャックを下ろし、自身のペニスを引っぱりだした。

クロッチを太ももによせ、先っぽを入れる。尻肉をガツシリ掴み、バランスをとると、衆人環視の中で力強く挿入する。

「はあああああゝゝゝンツ……………奥まで届いてるうううツ」  
尾を引き、余韻をたつぷり残す恥声が車内に響きわたった。

うわ、一気にいれられたのに、背筋をのけぞらせて感じまくってるぜ。

奥まで届いたって……………いいなあ、あんな綺麗な人の子宮口、俺も味わいたいよ。

床に汁がポタポタ垂れて水たまりになってる……………ホントに発情してるんだ。

「ふふふ、膣内の全面にビッシリある凹凸の深い肉ヒダが、やわやわとまとわりついて、奥へ奥へと引っぱってくれて、すごく気持ちいいです。発情して熱く煮えたぎっているのも、いやらしくヌルヌルしてるところも実に素敵ですよ」

正吾が勝ち誇ったような顔で、周囲に流し目を送る。

いやらしい美人を独占する『チャラ男』に、憎悪めいた嫉妬や羨望の視線が向けられた。特にサラリーマン層が顕著だった。自分はこんなに必死に働いているのに、チャラチヤラした若造がいい目を見やがって！ そんな目だった。

そして、満たされない熱情はみずほにぶつけられる。安っぽい男にカラダを委ねる女を見る目が、遠慮のない獣欲に染まっっていく。

「ああっ、いいっ、もつと私を見てえっ」

正吾が腰を振りはじめた。降りてきた子宮口が、槍の穂先型をしたプリプリの先っぽで何度も突きあげられる。開いた傘じみた広がり誇る亀頭冠が、膣内の全周囲を引っかい

て、女冥利を味わわせる。

複雑な感情でギラギラする男たちの目を意識しながら、みずほは考えていた。あの人たちの頭の中で、自分はどんな風に犯されているのだろうか。

同じ立ちバツクか、それとも向かい合っただけか。それだったら、片足を太ももの付け根から持ちあげて、ペニスが膣口を往復している様子を見せつける風にしてもらえていたらいいのに。私のおま　こがどんなに貪欲に啜えこんでいるのか見てもらえらるから。

グルリとみんなに囲まれて、騎乗位をさせられているのだったらどうしよう。想像するだけで、胸がドキドキして切なくなる。

どんなシチュエーションでも、このキャリアウーマンさんにはいて欲しい。私を蔑んで、呆れている役を与えて欲しい。

想像の羽を広げるほど、カラダが極彩色の官能に塗りつぶされていく。

「おま　この入り口がキュツと閉まって、奥が広がってますよ……もうイクんですね？」

次の停車駅が近づいていることを知らせるアナウンスが流れた頃だった。

「ええ、もうイクそう……あなたの、太くて硬くて熱くて長い、男らしい勃起ちんぽで、私のいやらしくてしょうがないおま　こをイかせて欲しいっ」

本音と観客へのサービス精神を特盛にした恥声で、おねだりする。

正吾は、ピストンを加速することで返事とした。

「ああ、イクツ、イクツ、イクウ、イクウウウウウー!!」

男たちの視線を浴びながら、みずほは盛大に背筋をのけぞらせた。艶やかでサラサラの黒髪がパアツと宙を舞い、見開かれただらしない目が法悦の涙をしたたらせる。興奮で赤く染まった唇は『ウ』から『あ』に切り替わり、唾液でヌラヌラの舌が突きだされた。そのまま宙空で固まって、身体の痙攣と連動してビクビクと震えている。

すげえ……イってる……マジでアクメってるぞ!

女の人の、生っぽいけどいい匂いが漂ってくる……すーはーすーはー!

垂れてる汁が白いのは、ザーメンか本気汁か……両方かもしれない……。

男は中出ししたのか? あんなエロい女に中出しなんてうらやまし過ぎる……。

やがて電車が駅に着いた。正吾が離れ、手早くペニスをスラックスの中へ押しこめる。

外から中を見ていたホームの人間が、みずほの淫靡な雰囲気にも呆然としていた。口をパクらせて立ち尽くしているキャリアウーマンと、情欲の権化とかがしていた男たちを置きざりにして、みずほと正吾は出入り口のステップを降りる。

「気持ちよかった、みずほさん?」

「ええ……素敵だったわ……」

「もう満足した?」

「まだ、ね……」

頭一つ分高い年下に、三十三歳の人妻がしなだれかかる。

家族は大事で愛しているが、この子からは離れられそうにない。例え、弱みを破棄されても、捨てないですすがってしまいうに違いない。そんな奇妙な確信を抱きながら寄りそっていた。

END